中等文教法科

用級上

文學博士
藤村作著

日本圖書株式會社

375.9
Fu10
資料室

41993
教科書文庫
4
815
41-1935
20000
38332

教科書文庫
4
815
41-1935
2000038332

昭和十年十二月二十一日
中學校國語漢文科用
文部省檢定濟

中等
法文科教

上級用

文學博士
藤村作著

日本圖書株式會社

広島大学図書
2000038332

資料室
375.9
Fu10

例言

一、本書は曩に改正された中學校令施行規則及び中學校教授要目に準據して、中學校上級の國語科に於ける文法の教科用書として編纂したものであります。

一、本書は國文法の一般的知識を修得することを主としましたが、また一方には實際的應用の修練にも役立つやう留意いたしました。隨つて說述は總べて一般の通說に從ふことに努め、特殊の說を樹てることを避けました。

一、本書は過去に於て修得した知識を十分に復習し整理し、其の基礎に立つて更にこれを補足しまた一層高い程度に進むやう編纂いたしました。

廣島大學圖書之印

廣島大學 教 38332 圖書

一、本書は常に口語と文語とを對照して、口語法と文語法とを共に十分習熟することを期しました。しかし上級に於ては國語教科書に文語文が多く加はります關係上、本書に於ては文語の文法をやゝ詳述することにいたしました。

一、本書の練習問題は、國語教科書と連絡し努めて平明自然なるものを採り、且つ詩趣に富んだものを選ぶことにし、無味乾燥に陷らないやうに留意いたしました。

昭和九年十月

編者識

中等教科文法　上級用

目次

前篇　品詞論

第一章　品詞概說……一

第二章　動詞の活用

一　活用と活用形……一一

二　文語の動詞……一三

三　口語の動詞……二一

第三章　形容詞及び形容動詞の活用

一　形容詞の活用……二七

二　形容動詞の活用……二八

第四章　音便

一　動詞の音便……三一
二　形容詞の音便……三三

第五章　助動詞の種類及び活用

一　助動詞の種類……三五
二　文語の助動詞……三六
三　口語の助動詞……四四

第六章　文語助動詞の接續

一　助動詞の接續……五二
二　動詞の未然形に附く助動詞……五三
三　動詞の連用形に附く助動詞……五七
四　動詞の終止形に附く助動詞……五九
五　動詞の連體形に附く助動詞……六一
六　動詞の已然形に附く助動詞……六二

七　助動詞相互の接續……六三

第七章　口語助動詞の接續

一　口語助動詞の接續……六六
二　動詞の未然形に附く助動詞……六七
三　動詞の連用形に附く助動詞……六九
四　動詞の終止形に附く助動詞……七〇
五　動詞の連體形に附く助動詞……七〇
六　口語の助動詞相互の接續……七一

第八章　助詞の用法

一　助詞の用法……七三
二　助詞の種類……七四
三　係りの助詞……七五
四　條件の助詞……七六
五　疑問・反語の助詞……八〇
六　願望・禁止の助詞……八三

七　指示・並列の助詞……八五

第九章　單語の合成及び音韻の轉化

一　單語の合成……九〇
二　疊語……九〇
三　熟語……九一
四　接頭語……九一
五　接尾語……九二
六　音韻の轉化……九三

第十章　品詞の轉成

一　品詞の轉成……九五
二　轉成の名詞……九六
三　轉成の代名詞……九七
四　轉成の副詞……九七
五　轉成の接續詞……九七

後篇　文章論

第一章　文の主成分及び其の構成

一　文……九九
二　主語……九九
三　述語……一〇一
四　客語……一〇二
五　補語……一〇三
六　文の主成分……一〇四
七　文主……一〇四

第二章　修飾語

一　修飾語……一〇六
二　修飾語の種類……一〇七
三　文の成分の解剖……一〇九

第三章　文の成分の位置

一　主語・述語の位置……一一一
二　客語・補語の位置……一一一
三　修飾語の位置……一一二
四　文の成分の倒置……一一三

第四章　文の成分の併置と省略

一　文の成分の併置……一一五
二　文の成分の省略……一一七

第五章　節（句）

一　節……一二〇
二　主語節……一二〇
三　述語節……一二一
四　客語節……一二一
五　補語節……一二一

六　修飾語節……一二一
七　對立節……一二三

第六章　文の構成上の種類

一　文の種類……一二三
二　單　語……一二四
三　複　文……一二四
四　重　文……一二五
五　構成上の文の解剖……一二五

第七章　文の性質上の種類

一　性質上の種類……一二七
二　叙述文……一二八
三　疑問文……一二八
四　命令文……一二九
五　感歎文……一二九

附錄

一　文法上許容スベキ事項
二　文語口語動詞活用對照表
三　文語口語助動詞活用對照表

前篇　品詞論

第一章　品詞概說

〔一〕文と語

言葉をつゞけて一つの纏まつた思想を表はすものを文または文章といひ、一つ一つの意味を表はす言葉を語または單語といふ。

青年は人生の春なり。

右は一つの纏まつた思想を表はすから文である。傍線を施した一つ一つの言葉は、それぞれ單語である。この例で見るやうに文は單語から成り立つものである。

主語
述語
修飾語

〔二〕**主語・述語・修飾語**　「花咲く。」「山高し。」の文は、花・山についてその狀態や動作を述べたもので、花・山はそれぞれ文の主となる題目である。かゝる語を**主語**といふ。また咲く・高しは文の主語花・山についてその狀態や動作を述べたもので、かかる語を**述語**いふ。また「清き水流る。」の清きのやうに他の語に添うてその意味を委しく定める語を**修飾語**といふ。

（この主語・述語・修飾語等については、文章篇に於てくはしく述べる。）

品詞

〔三〕**單語と品詞**　單語をその意味・形態（かたち）・職能（はたらき）の上から分類したものを**品詞**といふ。品詞は左の九種に分たれる。

名詞・代名詞・動詞・形容詞・助動詞・副詞
接續詞・感動詞・助詞

○右の九品詞の中、名詞・代名詞を總稱して**體言**といひ、動詞・形容詞

用言

を總稱して**用言**といふ。

名詞

〔四〕**名詞**　櫻・山・軍艦・努力・東京・源義經などのやうに、事物や地名や人名などすべて事物の名を表はす語を**名詞**といふ。

○右の例の櫻・軍艦・努力などのやうに同類の事物に共通に用ひられるものを**普通名詞**といひ、東京・源義經のやうに特に一つの事物に限つて用ひられるものを**固有名詞**といふ。

普通名詞
固有名詞

數詞

一つ・五・百・千・三冊・五人・十本・第三・九號・第百番などのやうに事物の數量や順序を表はす語もまた名詞である。これを特に**數詞**と稱へることがある。

○名詞には活用がない。名詞は主語となることが出來る。

代名詞

〔五〕**代名詞**　我・汝・彼・これ・そこ・どちらのやうに人・物・

場所などの名をいふ代りに、直ちにその事物を指し示す語を**代名詞**といふ。

人代名詞

○代名詞のうち、人の名を指し示すものを**人代名詞**といふ。その中、我・私などを**自稱**（第一人稱）といひ、汝・君などを**對稱**（第二人稱）といひ、これ・あれなどを**他稱**（第三人稱）といひ、たれ・なにがしなどを**不定稱**といふ。

指示代名詞

○代名詞のうち、事物・場所・方角の名を指し示すものを**指示代名詞**といふ。これ・ここ・こちらなどを**近稱**といひ、それ・そこ・そちらなどを**中稱**、あれ・かしこ・あちらなどを**遠稱**、いづれ・いづこ・どちらなどを**不定稱**といふ。

○代名詞も名詞のやうに活用がなく、又主語となることが出來る。

〔六〕**動詞**　學ぶ・眠る・富む・有りのやうに、事物の動作・狀態・存在を表はす語を**動詞**といふ。

動詞

動詞のうち

自動詞

鳥啼く。花散る。水流る。業終る。

のやうに、動詞の働がその物だけにとゞまり他に働を及ぼさず、從つてそれだけで意味の纏つてゐるものを**自動詞**といふ。

草を摘む。字を書く。書を讀む。犬を打つ。

他動詞

のやうに動詞の働が他の物に及び、從つてそれだけでは意味の纏まらないものを**他動詞**といふ。

○自動詞と他動詞とは形の異なるのが普通であるが、稀には全く同形のものもある。

（花開く（自動詞）　風吹く（自動詞））
（門を開く（他動詞）　火を吹く（他動詞））

○動詞の中には自動詞のみ有つて他動詞の無いものがあり、また

他動詞のみ有つて自動詞の無いものもある。眠る・來る・死ぬ・有りなどは前者の例で、投ぐ・打つ・送る・蹴るなどは後者の例である。

形容詞

〔七〕**形容詞**　高し・嬉しのやうに事物の性質或は狀態を表はす語を**形容詞**といふ。

○動詞も形容詞も共に活用を有するが、動詞は五十音圖の一行にのみ活用し、形容詞はカ行とサ行の二行に亙つて活用する。又動詞には命令形があるが形容詞にはない。尙、これらの活用に就いては後に述べる。

形容動詞

〔八〕**形容動詞**　清かり・嬉しかり・靜かなり・堂々たりのやうに、形容詞と同じ性質の語で、その活用がラ行變格活用の動詞と同じ語を**形容動詞**といふ。

○清かり・嬉しかりは形容詞の連用形清く・嬉しくに動詞あり

が連續して出來たものである。また靜かなり・堂々たりは副詞靜かに・堂々とに動詞ありの連續して出來たものである。

かくの如く形容詞には二種類がある。

○文語の形容動詞の活用は動詞のラ行變格活用と同じである。

助動詞

〔九〕**助動詞**　「雨降らむ」「花散りぬ」のむ・ぬのやうに、主として動詞に添うて、その意味を助ける語を**助動詞**といふ。

○助動詞は主として動詞に連るものであるが、大將たり・彼なり・水の如しのやうに、名詞・代名詞・助詞に連る場合もあり、學ばしめざるべからずのやうに他の助動詞に連る場合もある。

○助動詞はその性質上次の十一種に分類することが出來る。

打消・指定・推量・時・受身・可能・使役・尊敬・希望・咏嘆・比況

（これらの性質・活用に就いては後に述べる。）

副詞

〔一〇〕**副詞**　「甚だ多し。」「暫く休む。」の甚だ・暫くのやうに、主として

動詞や形容詞の意味を限定する語を**副詞**といふ。

○副詞はまた副詞・體言・語句・文などの意味をも限定することがある。

やゝ暫く休みたり。（副詞の限定）

凡そ三百メートルを走れり。（體言の限定）

全山の櫻花は恰も白雲のかゝれるが如し。（語句の限定）

恐らく彼は未來の大臣たらん。（文の限定）

○副詞は活用を有しない。また主語となる事がない。

○副詞の位置は、その限定すべき語のすぐ上にあるのが通例であるが、時とすると、「靜かに來し方行く末のことを思ふ。」のやうに、他の語句を隔てることがある。

〔二〕**接續詞**　「英語及び佛蘭西語を學ぶ。」「雪降り且風吹く。」の及び・且のやうに、前を受けて後に結びつける語を**接續詞**といふ。

○接續詞は活用を有しない。またこの語は主語にも述語にも修飾語にもなることが出來ない。

○接續詞は前にあげたものゝ外に、又・尙・或は・但し・されど・然らば・故に・隨ひて・因りて・尤も・その上・さうして・すると等がある。

〔三〕**助詞**　「夏は來ぬ。」「本を讀む。」「山に栗を拾ふ。」のは・を・にのやうに、種々の語に附いて、その語と下に來る語との關係を示し、又、これに或意味を添へる語を**助詞**といふ。

○助詞は活用を有しない。常に他の語に附き、その語と共に用ひられる。

○助詞は次の三種に分つことが出來る。

一　名詞・代名詞に附いて他の語に對する關係を示すもの
　君が代・花の枝・山に遊ぶ・月を見る……等

二　動詞・形容詞・助動詞に附いて他の語に對する關係を示すもの

行かば喜ばれん。山高くとも恐れじ。行きしが見得ざりき・等

三　前の二種以外のもの

雨降り風さへ加はる。名のみ殘れり。秋こそまされ・等

〔三〕**感動詞**　あはれ・あゝ・すはのやうに感動を表はす語又は、「否」「然り」のやうに應答を表はす語を**感動詞**といふ。

○感動詞は活用を有しない。主語・述語・修飾語になることが出來ない。「あら尊とや。」「あはれ悲しきかな。」「彼ひとり止まりたるよ」のや・かな・よなども感動を表はす語であるが、これらは感動を表はす助詞と見るのがよい。

練習　一

左の文を品詞に分解せよ。

1「おい。」と聲をかけたが返事がない。

2門かすぞ啼かずに遊べ雀の子。

活用と活用形

3毎夜出て人をつかんで食ふ按摩。

4夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月やどるらん。

5櫻は仰ぎて見るもよく俯して見るもよし。花の德すぐれたりとやいはん。

6つくゝぼうしといふ蟬は、つくしこひしともいふなり。「筑紫の人の旅に死してこのものになりたり。」と世の諺にいへりけり。

7松風遠く吹きあはせて、波の音もかすかなる物思まさる夕なりき。われ獨り清見が關の宿を立出でゝ三保の松原に遊ぶ。入日の影は雲にのみ殘りて月未だ上らず。田子の浦曲の夕なぎに千鳥の聲もいと稀なり。

第二章　動詞の活用

〔一〕**活用と活用形**　品詞の中、活用を有するものは、動詞・形容詞・助動詞である。活用といふのはこれらの品詞の語尾の變化

語幹
語尾

する事である。例へば動詞「死ぬ」は

死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

と語尾が變化する。この變化をさして**活用**といふので、この變化した各々の形を**活用形**といふ

○右の例に於て、「死」のやうに變化しない部分を**語幹**(語根)といひ、な・に・ぬ・ぬる・ぬれ・ねのやうに變化する部分を**語尾**といふ。

活用形には未然形・連用形・終止形・連體形・已然形・命令形の六種がある。

活用の種類は、文語に、四段・上二段・下二段・上一段・下一段・カ行變格・サ行變格・ナ行變格・ラ行變格の九種があり、口語に、四段・上一段・下一段・カ行變格・サ行變格の五種がある。

文語の動詞
四段活用

〔二〕文語の動詞

一　四段活用

語幹ア段	語幹イ段	語幹ウ段	語幹エ段
行	か	き	く	け	け

のやうに五十音圖のア段・イ段・ウ段・エ段の四段に活用するものを**四段活用**といふ。

○四段活用の動詞は、カ・サ・タ・ハ・マ・ラの六行にある。

動詞	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令	行
書く	書	か	き	く	く	け	け	カ行
指す	指	さ	し	す	す	せ	せ	サ行
勝つ	勝	た	ち	つ	つ	て	て	タ行
請ふ	請	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ	ハ行
踏む	踏	ま	み	む	む	め	め	マ行
取る	取	ら	り	る	る	れ	れ	ラ行

○カ行・ハ行には、磨ぐ・喜ぶのやうに濁音がある。

上二段活用

二　上二段活用

語幹	イ段	ウ段	イ段
落	ち	ち	つ	つる	つれ	ちよ

のやうに、五十音圖のイ段とウ段とに活用し、連體形にる、已然形にれ、命令形によの附いたものを**上二段活用**といふ。

○上二段活用の動詞は、五十音圖中、カ・タ・ハ・マ・ヤ・ラの六行にある。

動詞	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令	行
生く	生	き	き	く	くる	くれ	きよ	カ行
落つ	落	ち	ち	つ	つる	つれ	ちよ	タ行
用ふ	用	ひ	ひ	ふ	ふる	ふれ	ひよ	ハ行
試む	試	み	み	む	むる	むれ	みよ	マ行
老ゆ	老	い	い	ゆ	ゆる	ゆれ	いよ	ヤ行
懲る	懲	り	り	る	るゝ	るれ	りよ	ラ行

○カ行・タ行・ハ行には、過ぐ・恥づ・延ぶのやうに濁音もある。

○右の表中、用ふは上二段の外、ワ行の上一段にも活用し、また試むは上二段の外、マ行上一段にも活用する。

三　下二段活用

音圖のウ段とエ段との二つに活用して、連體形にる、已然形にれ、命令形によの附いたものを**下二段活用**といふ。

語幹	エ段	ウ段	ウ段	ウ段	ウ段	エ段
尋	ね	ね	ぬ	ぬる	ぬれ	ねよ

のやうに五十

○下二段活用の動詞は五十音圖の各行にある。

動詞	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令	行
得	(得)	え	え	う	うる	うれ	えよ	ア行
懸く	懸	け	け	く	くる	くれ	けよ	カ行
寄す	寄	せ	せ	す	する	すれ	せよ	サ行
企つ	企	て	て	つ	つる	つれ	てよ	タ行
尋ぬ	尋	ね	ね	ぬ	ぬる	ぬれ	ねよ	ナ行
與ふ	與	へ	へ	ふ	ふる	ふれ	へよ	ハ行
改む	改	め	め	む	むる	むれ	めよ	マ行
覺ゆ	覺	え	え	ゆ	ゆる	ゆれ	えよ	ヤ行
枯る	枯	れ	れ	る	るゝ	るれ	れよ	ラ行
据う	据	ゑ	ゑ	う	うる	うれ	ゑよ	ワ行

○得は語幹と語尾の區別をつけることが出來ない。

上一段活用

○ア行とワ行の動詞の活用を混同しないやうに注意を要する。

四　上一段活用

十音圖のイ段のみに活用し、終止・連體の兩形にる、已然形にれ、命令形によの附いたものを**上一段活用**といふ。

語幹	着	着	着	着	着	着
イ段	き	き	きる	きる	きれ	きよ

のやうに五

○上一段活用は カ・ナ・ハ・マ・ヤ・ワの六行にある。

動詞	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令	行
着る	(着)	き	き	きる	きる	きれ	きよ	カ行
煮る	(煮)	に	に	にる	にる	にれ	によ	ナ行
干る	(干)	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ	ハ行
見る	(見)	み	み	みる	みる	みれ	みよ	マ行
射る	(射)	い	い	いる	いる	いれ	いよ	ヤ行
率ゐる	(率)	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ	ワ行

○上一段活用の動詞は、以上の外に似る・顧みる・惟みる・鑑みる・試みる・居(キ)る、などがある。

下一段活用

五　下一段活用

十音圖のエ段にのみ活用し、終止・連體兩形にる、已然形にれ、命令形によが附いたものを**下一段活用**といふ。

語幹	(蹴)	(蹴)	(蹴)	(蹴)	(蹴)	(蹴)
エ段	け	け	ける	ける	けれ	けよ

のやうに五

○下一段活用の動詞はカ行に一語あるのみである。

動詞	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令	行
蹴る	(蹴)	け	け	ける	ける	けれ	けよ	カ行

○以上に説明した四段・上二段・下二段・上一段・下一段の五つの活用を**正格活用**といふ。

正格活用

カ行變格活用

六　カ行變格活用

行のイ段・ウ段・オ段に活用し、連體形にる、已然形にれ、命令形によが附いたものを**カ行變格活用**といふ。

語幹・オ段・イ段	ウ段	オ段
來	こ	こ
	き	こ
	く	くる
	くる	くれ
	くれ	こよ

のやうにカ

○カ行變格活用は來(く)の一語である。

サ行變格活用

七　サ行變格活用

行のイ段・ウ段・エ段によの附いたものをサ行變格活用といふ。

○サ行變格活用は爲（す）と在（ゐ）すの二語だけである。但、在すは現代文にはあまり用ひられぬ。

動詞	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令	行
來	（來）	こ	き	く	くる	くれ	こよ	カ行

語幹エ段イ段ウ段エ段								
（爲）	せ	し	す	する	する	すれ	せよ	

のやうに、サ行變格活用は以上の二語の外に、罪す・勉强す・論ず・スケッチすのやうに國語の名詞及び漢語・洋語などが「す」と結びついて成つたものがあり、また、明らかにす・正しくす・全

動詞	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令	行
爲（す）	（爲）	せ	し	す	する	すれ	せよ	サ行

ナ行變格活用

うすのやうに副詞と「す」と結びついて成つたものとがある。

八　ナ行變格活用

のア段・イ段・ウ段・エ段の四段に活用し、連體形にる、已然形にれが附いたものをナ行變格活用といふ。

ア段イ段ウ段エ段					
死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

のやうにナ行

○ナ行變格活用は、死ぬ・往ぬの二語である。但、死ぬは現代文では四段活用にも用ひられ、往ぬは現代文には餘り用ひられない。

動詞	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令	行
死ぬ	死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね	ナ行

ラ行變格活用

九　ラ行變格活用

段イ段・ウ段・エ段の四段に活用し、しかもイ段で終止形となるものをラ行變格活用といふ。

○ラ行變格活用は有り・居り・侍りの三語である。但、居りは四段活用にも用ひられ、侍りは現代文には用ひられぬ。

語幹ア段イ段ウ段エ段					
有	ら	り	り	る	れ	れ

のやうにラ行のア

動詞	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令	行
有り	有	ら	り	り	る	れ	れ	ラ行

○以上にあげたカ行變格・サ行變格・ナ行變格・ラ行變格の四を總稱して**變格活用**といふ。

練習　二

一、左の文中より動詞を摘出し、その活用の全形を示せ。

1 年暮れぬ笠着て草鞋はきながら。

2 我が宿の池の藤浪咲きにけり山時鳥いつか來鳴かむ。

3 日落ちて山暗うなりゆく時、點々として花のみ白う暮れ殘るさまいとあはれなり。

二、左の文中の動詞につき、その活用の種類及び活用形を問ふ。

1 沖の小島と誰がよみたりし、初島わたり漕ぐふなうたの寄る浪ごとに聞ゆるもゆかし。

口語の動詞

口語四段活用

2 春は來ぬ、春は來ぬ。霞よ雲よ、ゆるぎいで、氷れる空をあたゝめよ。花の香おくる春風よ、眠れる山を吹きさませ。

3 公は長袖の人とも覺えぬばかりに剛毅の德を備へおはしけり。また公は日に夜に公の事にのみ心を碎きて寸時も餘りの暇あらせ給はざりき。

〔三〕口語の動詞

口語の動詞の活用は四段・上一段・下一段・カ行變格・サ行變格の五種である。文語に於ける上二段・下二段・ナ行變格・ラ行變格の四つの活用は口語に於ては消滅してゐるのである。

一　四段活用　口語の四段活用と文語の四段活用とは全く同形である。文語のナ行變格とラ行變格とは、口語ではいづれも四段活用となる。いま左に口語と文語とを比較してみよう。

口語上一段活用

二　上一段活用

口語の上一段と文語の上一段とは全く同形である。文語の上二段は口語に於てはすべて上一段となる。いま左に口語と文語とを比較してみよう。

體	活用	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令	異同
口語	四段	降	ら	り	る	る	れ	れ	同形
文語	四段		ら	り	る	る	れ	れ	
口語	四段	死	な	に	ぬ	ぬ	ね	ね	連體形・已然形が異なる。
文語	ナ變		な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね	
口語	四段	有	ら	り	る	る	れ	れ	終止形が異なる。
文語	ラ變		ら	り	り	る	れ	れ	

	活用	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令	異同
口語	上一段	(見)	み	み	みる	みる	みれ	みよ(みろ)	同形
文語	上一段		み	み	みる	みる	みれ	みよ	

口語下一段活用

○口語の命令形にはみろ・落ちろのやうに用ひる場合もある。

口語	上一段	落	ち	ち	ちる	ちる	ちれ	ちよ(ちろ)	終止形・連體形・已然形が異なる。
文語	上二段		ち	ち	つ	つる	つれ	ちよ	

三　下一段活用

口語の下一段と、文語の下一段とは全く同形である。文語の下二段は口語に於てはすべて下一段となる。いま左に口語と文語とを比較して見よう。

	活用	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令	異同
口語	下一段	(蹴)	け	け	ける	ける	けれ	けよ(けろ)	同形
文語	下一段		け	け	ける	ける	けれ	けよ	
口語	下一段	捨	て	て	てる	てる	てれ	てよ(てろ)	終止形・連體形・已然形が異なる。
文語	下二段		て	て	つ	つる	つれ	てよ	

○口語の命令形には、蹴ろ・捨てろのやうに用ひる場合もある。

口語カ行變格活用

口語サ行變格活用

四　カ行變格活用　口語のカ行變格と文語のカ行變格とは左表に示すやうに終止形と命令形がやゝ異なる。

	活用	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令	異同
口語	カ變	（來）	こ	き	くる	くる	くれ	こい	終止形と命令形が異なる。
文語	カ變		こ	き	く	くる	くれ	こよ	

五　サ行變格活用　口語のサ行變格は文語のサ行變格とは左表に示すやうに、終止形が異なる。但、口語のサ行變格は、其の未然形にし、命令形にしろといふ別形がある。

	活用	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令	異同
口語	サ變	（爲）	せ	し	する	する	すれ	せよ しろ	未然形と終止形と命令形が異なる。
文語	サ變		せ	し	す	する	すれ	せよ	

○右の表で見る通り、口語のサ變には未然形に二形があるが、しかしそれが打消の助動詞ぬ・ないにつづく時は、一定の約束がある。即ち勉強せぬ・しない・といふ用法は正しく、勉強しぬ・せない・の用法は誤りである。また命令形の二形にも努力せよ・しろの形は正しく、努力しよ・せろの用法は正しくない。

○文語のサ變の動詞は、口語では次のやうに活用するものがある。

文語サ變	語幹	口語 未然	口語 連用	口語 終止	口語 連體	口語 已然	口語 命令	口語活用
案ず	案（あん）	じ	じ	じる	じる	じれ	じよ	サ行上一段
解す	解（げ）	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ	サ行下一段
議す	議	さ	し	す	す	せ	せ	サ行四段

以上、口語動詞の活用を説明したのであるが、これを文語の活用と比較してその關係を示せば左の通りである。

文語・口語活用の比較

口語動詞の活用	文語動詞の活用
四段活用	四段活用　ナ行變格活用　ラ行變格活用
上一段活用	上二段活用　上一段活用
下一段活用	下二段活用　下一段活用
カ行變格活用	カ行變格活用
サ行變格活用	サ行變格活用

練習三

次の文中の動詞の活用の種類を問ふ。

1 眞に良い文章を作らうと思ふ者は、先づ自己から正してかゝらねばならない。

2「おい。」と聲をかけたが返事がない。軒下から奥をのぞくと煤けた障子が立てきつてある。向側は見えない。

3 リンカーンは智もあり、勇もあり、義に富み、その德は萬世に輝き、その澤は四海に溢れる偉人でありますが、その少年時代は實に不仕合でありました。

4 人の命は盡きる時がある。しかしその名は絶える時がない。

形容詞の活用

第三章　形容詞及形容動詞の活用

〔一〕形容詞の活用　文語・口語共に形容詞の活用は、**ク活用**と**シク活用**との二種である。その活用の特色は、文語に於てはカ行とサ行とに跨り、口語に於てはア行とサ行に跨ることである。これを表示すれば左の通りである。

	種類	語幹	未然	連用	終止	連體	已然
文語	ク活用	清	く	く	し	き	けれ
文語	シク活用	樂	しく	しく	し	しき	しけれ
口語	ク活用	清	○	く	い	い	けれ
口語	シク活用	樂	○	しく	しい	しい	しけれ

○形容詞の活用には命令形がない。

○口語の形容詞には右表の如く未然形がない。また已然形は假定形となる。口語で未然を表はすには假定形を用ひる。

○形容詞の活用は文語と口語と終止形と連體形とが異なる。

○「樂し」は、もし樂しまでを語幹と見れば

語幹	未然	連用	終止	連體	已然
樂し	く	く	○	き	けれ

となる。

〔二〕形容動詞の活用

文語の形容動詞は、ラ行變格活用の動詞と同じやうに活用する。

口語の形容動詞

形容動詞	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令
清かり	清か	ら	り	り	る	れ	れ
樂しかり	樂しか	ら	り	り	る	れ	れ
靜かなり	靜かな	ら	り、	り	る	れ	れ
堂々たり	堂々た	ら	り	り	る	れ	れ

口語の形容動詞の活用は次の二種である。

	語幹	未然	連用	終止	連體	假定
第一種	清樂し	から	かつ	○	○	○
第二種	穩かだら丁寧	だら	だつ	だ	な	なら

○第一種及第二種の未然形は、助動詞うに連り、「清からう」「樂しからう」「穩かだらう」「丁寧だらう」などとなる。またその連用形は助動詞のたに連つて「清かつた」「樂しかつた」「穩かだつた」「丁寧だ

つた」などとなる。

○第二種の假定形は、そのまゝ假定の意を表はし、また助詞「ば」に連ることもある。「波が穩かなら(ば)出發しよう。」「態度が丁寧なら(ば)問題は起らないだらう。」などと用ひられる。

練習　三

次の文中より形容詞・形容動詞を選び出し、その種類をいへ。

1 砂白く松青きほとり濱千鳥の群れ飛ぶさまもいとをかし。
2 景色よき地には歴史上のゆかしさなく、歴史上にゆかしき地には景色に風情なきもの世には多かり。
3 賢き子は家を興し愚かなる子は家を滅す。
4 堂々たる彼の態度に少からざる尊敬の念を生じたり。
5 青い柳が水に垂れて吹く風も涼しい。
6 明日もやはり天氣は惡からう。

動詞の音便

イ音便

7 今夜波が靜かなら船で出發いたしませう。
8 兄と一緒なら大丈夫だらうと思つたが、行つて見るとそれでもやはり心細かつた。

第四章　音便

〔一〕動詞の音便　サ行以外の四段活用及びナ・行變格活用・ラ行變格活用の動詞がその連用形から、て(口語では、て・た・たり)に連る時、發音の便宜上普通の活用形とは異つた形に變ずる。これを**動詞の音便**といふ。

動詞の音便には、イ音便・ウ音便・撥音便・促音便の四種がある。

一　イ音便　語尾「き・ぎ」の音がいになるもの。

書き・書いて(文語・口語)　書いた(口語)　書いたり(口語)

騒ぎ・騒いで(文語・口語)　騒いだ(口語)　騒いだり(口語)

ウ音便

二　ウ音便　語尾ひの音がうになるもの。

請うて（文語・口語）
請ひ・請うた（口語）
請うたり（口語）

○ウ音便はハ行四段にある。

撥音便

三　撥音便　語尾み・び・にの音が撥ねる音のんになるもの。

汲んで（文語・口語）
汲み・汲んだ（口語）
汲んだり（口語）

死んで（文語・口語）
死に・死んだ（口語）
死んだり（口語）

飛んで（文語・口語）
飛び・飛んだ（口語）
飛んだり（口語）

○撥音便はマ行四段・バ行四段・ナ行變格にある。

促音便

四　促音便　語尾ち・ひ・りの音がつまる音のつになるもの。

勝つて（文語・口語）
勝ち・勝つた（口語）
勝つたり（口語）

買つて（文語・口語）
買ひ・買つた（口語）
買つたり（口語）

取つて（文語・口語）
取り・取つた（口語）
取つたり（口語）

有つて（文語・口語）
有り・有つた（口語）
有つたり（口語）

○促音便はタ行四段・ハ行四段・ラ行四段・ラ行變格にある。

形容詞の音便

〔三〕形容詞の音便　形容詞にも音便がある。その文語にはイ音便とウ音便の二種があり、口語にはウ音便のみがある。

イ音便　語尾きの音がいになるもの。

遠きかな――遠いかな（文語）

悲しきかな――悲しいかな（文語）

ウ音便　語尾くの音がうになるもの。

樂しく覺ゆ――樂しう覺ゆ（文語）

長くございます――長うございます（口語）

練習　四

一、例をあげて動詞の音便を説明せよ。

二、次の文中の音便を指摘し、且その種類をいへ。

1 勇みに勇んで突進す。

2 「すは勝つたるぞ。」と手を打つて喜ぶ。

3 負うた子に教へられて淺瀨を渡る。

4 朝に星を戴いて出で、夕べに月を踏んで歸る。

5 今から何と言うたとて返らぬ事だ。

6 泣いても笑つてもあと一日となつた。

7 よい機會を失うてはならぬと言つてやつた。

8 嶺高うして道細く山嶮しうして苔滑らかなり。

9 青い柳が水に垂れて大層涼しい感じがする。

10 首尾よく合格せられておめでたうございます。

第五章　助動詞の種類及び活用

〔一〕助動詞の種類

助動詞はその表はす意味の上から、次の十一種に分類される。

打消　指定　推量　時　受身　可能

使役　尊敬　希望　咏嘆　比況

文語の助動詞

打消の助動詞

いまこれらに就いてその意義と活用とを説明しよう。

〔三〕文語の助動詞

一　打消の助動詞

「勇者は恐れず。」「誰も知るまじ。」のず・まじのやうに動作を打消す意を表はすものを**打消の助動詞**といふ。その總ての助動詞と活用を示せば次のやうである。

打消						
助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	○
ざり	ざら	ざり	(ざり)	ざる	され	ざれ
じ	○	○	じ	(じ)	(じ)	○
まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	○

○じ・まじは打消と共に推量の意味をもつてゐる。それでこ

指定の助動詞

推量の助動詞

れを推量の助動詞に入れることもある。

○ざりの終止形は多くの場合用ひられることがない。その代りにずを用ひる。

○表中（）内の活用は、その用例の少ないものである。以下も同じ。

二　指定の助動詞

「東京は日本の首府なり。」「我は近衛の大將たり。」のなり・たりは事物を指し定める意を表はすものであるからこれを**指定の助動詞**といふ。その活用は次のやうである。

指定					
助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
なり	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

三　推量の助動詞

「雲のいづくに月宿るらむ。」「明日は天氣

よかるべし」のらむ・べしのやうに事物を推し量る意を表はすものを**推量の助動詞**といふ。その總ての助動詞と活用とを示せば次のやうである。

推量							
助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
らむ	○	○	らむ	うむ	らめ	○
らし	○	○	らし	(らし)	(らし)	○
まし	○	○	まし	まし	ましか	○
べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	○
べかり	べから	べから	べかり	○	べかるべかれ	○
けむ	○	○	けむ	けむ	けめ	○
めり	○	○	めり	める	めれ	○
む	○	○	む	む	め	○

○けむは過去の事實を推量していふ時に用ひる。

べしの用法

○ましは「我若し胡蝶ならましかば、いかに樂しからまし。」のやうに事實でない事を假にさうと決めていふ趣である。又「思ふことなくてぞ見まし」のやうに願望の意をも表はす場合がある。

○べしには推量の外に次の如き用法がある。

一、**可能**　高き山も登らば登るべし（登ることが出來る）

二、**命令**　明早朝出發すべし（出發しなさい）

三、**當然**（義務）　學生はその本分を守るべきものなり（守らねばならぬものだ）

四、**決意**（斷定）　我は死すとも實行すべし（實行しよう）

時の助動詞

四　時の助動詞　「花散りぬ。」「夏は來けり。」のぬ・けりのやうに時を表はすものを**時の助動詞**といふ。その總ての助動詞と活用とを示せば次のやうである。

受身の助動詞

時	助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
過去	き	○	○	き	し	しか	○
過去	けり	(けら)	○	けり	ける	けれ	○
完了	つ	て	て	つ	つる	つれ	(てよ)
完了	ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	(ねよ)
完了	たり	たら	たり	たり	たる	たれ	○
完了	り	(ら)	(り)	り	る	(れ)	○
未來	む	○	○	む	む	め	○

五　受身の助動詞　「小手を打たる。」「通行を止めらる。」のる・らるのやうに動作を他から受ける意を表はす語を**受身の助動詞**といふ。その活用は次のやうである。

可能の助動詞

使役の助動詞

受身	助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
	る	れ	れ	る	るゝ	るれ	れよ
	らる	られ	られ	らる	らるゝ	られる	られよ

六　可能の助動詞　「一時間以内に目的地に行かる。」「父に譽められる。」のる・らるのやうに、其の事を爲し得る意を表はすものを**可能の助動詞**といふ。

可能の助動詞の活用は、前にあげた受身の助動詞と同様である。但、可能の助動詞には命令形はない。

七　使役の助動詞　「繪を書かす。」「苗木を庭に植ゑさす。」のす・さすのやうに、他を使役する意を表はすものを**使役の助動詞**といふ。その總ての助動詞と活用とを示せば次のやうである。

尊敬の助動詞

八　尊敬の助動詞「父は旅行を好まる。」「先生も出席せらる。」のる・らるのやうに、他を尊敬する意を表はすものを**尊敬の助動詞**といふ。

尊敬の助動詞は、る・らる・す・さす・しむの五語である。その活用は、る・らるは受身のる・らると同じである。また、す・さす・しむは使役のす・さす・しむと同じである。

○「殿下には親しく民をねぎらはせ給ふ。」「謹みて賀表を奏し奉る。」「産業を御奬勵遊ばす。」の給ふ・奉る・遊ばすは本來の動詞の

使役					
助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
す	せ	せ	す	する	すれ	せよ
さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ
しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ

希望の助動詞

意味を失つて、單に敬語として用ひられたのであるから、これらの語は助動詞と見なすのである。この種に屬する語には、參らす・候ふ・侍り等がある。

九　希望の助動詞「故郷に歸りたし。」「われ一人行かまほし。」のたし・まほしは希望の意を表はすものであるから、これを**希望の助動詞**といふ。その活用は次のやうである。

希望					
助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
たし	たく	たく	たし	たき	たけれ	○
まほし	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ	○

比況の助動詞

一〇　比況の助動詞「散る花は雪の降るが如し。」の如しは事物を比較する意を表はすものであるから、これを**比況の助動詞**といふ。その活用は次のやうである。

咏嘆の助動詞

二　咏嘆の助動詞　「雁が音遠く聞ゆなり。」「見渡せば花も紅葉もなかりけり。」のなり・けりは咏嘆の意を表はすものであるから**咏嘆の助動詞**といふ。その活用は次のやうである。

咏嘆					
助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
なり	○	○	なり	なる	なれ	○
けり	○	○	けり	ける	けれ	○

○指定のなりと咏嘆のなりとを混同してはいけない。（後の動詞と助動詞との連續の項參照）

口語の助動詞

〔三〕口語の助動詞　口語の助動詞もほゞ文語の助動詞と同樣

であるが、たゞ咏嘆の助動詞を缺いてゐる。即ちその種類は

打消　指定　推量　時　受身　可能　使役
尊敬　希望　比況

の十種である。いま左にその各々に就いて略述しよう。

口語打消の助動詞

一　打消の助動詞　ぬ(ん)・ない・まい

（用例）花はまだ咲かない。　今日は行かぬ(ん)。
恐らく誰も知るまい。

打消					
助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
ぬ	○	ず	ぬ(ん)	ぬ(ん)	ね	○
ない	○	なく	ない	ない	なけれ	○
まい	○	○	まい	(まい)	○	○

口語指定の助動詞

二　指定の助動詞　だ・です

（用例）日本の國花は櫻だ。　あれは私の家です。

指定	未然	連用	終止・連體	假定	命令
だ	だら(う)	だつ(た)	だ	(な)	なら(ば)
です	でせ(う)	でし(た)	です	○	○

口語推量の助動詞

三　推量の助動詞　う　よう・らしい

（用例）海も靜かだらう。　よく勉強しよう。
時々兄も行くらしい。

推量	未然	連用	終止	連體	假定	命令
う	○	○	う	○	○	○
よう	○	○	よう	○	○	○
らしい	○	らしく	らしい	らしい	○	○

口語時の助動詞

四　時の助動詞　た(だ)・う・よう

（用例）今朝は四時に起きた。　會は早く濟んだ。
すぐ兄も歸らう。　やがて日も暮れよう。

時	未然	連用	終止	連體	假定	命令
過去	た	たら(う)	た	た	たら(ば)	
完了	だ	だら(う)	だ	だ	だら(ば)	
未來	う		う	う		
	よう		よう	(う)		

口語受身の助動詞

五　受身の助動詞　れる・られる

（用例）面を打たれる。　人々に褒められる。

受身	未然	連用	終止	連體	假定	命令
助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
れる	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ(れろ)
られる	られ	られ	られる	られる	られれ	られよ(られろ)

口語可能の助動詞

六　可能の助動詞　れる・られる

（用例）舟でも汽車でも行かれる。　到る處で見られる。

○可能の助動詞の活用は受身の助動詞と同様である。但、可能には命令形は無い。

口語使役の助動詞

七　使役の助動詞　せる・させる

（用例）繪と字を書かせる。　塵を捨てさせる。

使役						
助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ（せろ）
させる	させ	させ	させる	させる	させれ	させよ（させろ）

口語尊敬の助動詞

八　尊敬の助動詞　れる・られる・ます

（用例）父は毎朝佛典を讀まれる。　母は毎朝五時に起きられる。　私も東京へ行きたいと思ひます。

○れる・られるの活用は受身の場合と同様である。　ますの活用は次のやうである。

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
ます	ませ	まし	ます	ますれ（ませ）（まし）		

○以上あげた三語の外に、「下さる」「なさる」「遊ばす」「致す」「申す」になる」などの動詞を尊敬の助動詞として用ひることがある。

口語希望の助動詞

九　希望の助動詞　たい

（用例）早く家へ歸りたい。

希望						
助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
たい	○	たく	たい	たい	たけれ	○

○「たく」が「存じます」「ございます」に連る時は「參りたう存じます」「參りたうございます」のやうに「たう」となる。

○「たく」と「ある」と結合して一語となつたものは、「行きたからう」「行きたかつた」のやうに用ひられる。

二　比況の助動詞　やうだ　やうです

（用例）花の散るのが雪のやうだ。　海面は鏡のやうです。

比況					
助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
やうだ	やうだら(う)	やうだつ(た)	やうだ	やうな	やうなら	○
やうです	やうです(う)	やうでし(た)	やうです	○	○	○

口語比況の助動詞

練習　五

一、次の文中より助動詞を選び出し、その種類をいへ。

1　みがかずば玉の光は出でざらむ人の心もかくこそあるらし。
2　滿場の喝采暫しは鳴りも止まざりき。
3　彼は善く戰へり。然れども其の本國は却つて敵の侵入を防ぎ

得ず、勢の救ふべからざるに及んで彼を召喚して之に當らしむ。
嗚呼また遲しといふべし。
4　古より偉人とよばれ豪傑と稱せられし人は、大抵皆分陰を惜みて機會を捕へし人なり。
5　飴賣のチャルメラきけば失ひしをさなき心ひろへるごとし。

二、次の文中の助動詞の活用をいへ。

1　夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづくに月宿るらむ。
2　あまりの事に泣くにも泣かれず、唯呆然として立たせ給ふ。
3　如何なる人なりけむ尋ねきかまほし。
4　今にして改めずば必ず大なる悔あらむ。
5　しば〳〵誡めたれども改めむともせざりき。

三、次の文中の助動詞を指摘し、その種類をいへ。

1　たとひ大金で買つた品でも命にはかへられませぬ。
2　私の前の級では勉強をしない者は一人もありませんでした。

3 山を見ても、川を見ても思ひ出の種とならないものはありません。

4 雨がやんだら御一緒に散歩に出かけようではありませんか。

5 三勇士たちはいかにしてこの猛射の中を衝いて破壞作業を達成すべきかを考へずにはゐられなかつた。

第六章　文語助動詞の接續

助動詞の接續

〔一〕**助動詞の接續**　助動詞は、動詞に附いて其の意味を補ひ助けるものが最も主なる用法であるが、動詞の外、助動詞相互にも接續し、また體言その他に附いてこれに叙述する意味を與へるものもある。而して助動詞が動詞に附き、或は助動詞相互に附く場合には、常に一定の法則がある。いまその法則の概要を左に説明しよう。

動詞の未然形に附く助動詞

打消

推量

時

〔二〕**動詞の未然形に附く助動詞**　動詞の未然形に附く助動詞は、打消・推量・受身・可能・使役・尊敬・希望の八種である。

一　打消　**ず・ざり・じ**

ず・ざり・じは總べての動詞の未然形を受ける。

秋立てど暑さは去らず。（四段）

降雨のため終日外出せざりき。（サ變）

出師の表を見て泣かざる者はあらじ。（ラ變）

二　推量　**まし**

推量の助動詞の中、**まし**は總べての動詞の未然形を受ける。

渡らば錦中や絶えまし。（下二段）

思ふことなくてぞ見まし。（上一段）

三　時　**む（り）**

時の助動詞の中、**む**は總べての動詞の未然形に附く

綠蔭にひとり書を讀まむ。（四段）

山の霧も夕べには晴れむ。（下二段）

○むは形容動詞の未然形をも受ける。「今宵は波も靜かならむ。」

時の助動詞の中、**り**は未然形からはサ變の動詞に限つて附く。

彼は國家の財政を救ふ途を畫策せり。（サ變）

○りは四段とサ變との二つに限つてつく。四段からはその已然形につき、サ變からはその未然形につく。

四　受身（可能・尊敬）る・らる

るは四段・ナ變・ラ變の動詞の未然形に附く。

旅人に道を問はる。（四段）

受身（可能）（尊敬）

彼は十歳にして父に死なる。（ナ變）

夜更くるまで客に居らる。（ラ變）

○可能・尊敬の助動詞るも亦受身のると同樣に附く。

らるは四段・ナ變・ラ變以外の動詞の未然形に附く。

旅人に登山の道を尋ねらる。（下二段）

市の街路樹はみな愛護せらる。（サ變）

○可能・尊敬の助動詞らるも受身のらると同樣に附く。

五　使役（尊敬）す・さす・しむ

すは四段・ナ變・ラ變の動詞の未然形に附く。

弟を先に行かす。（四段）

國の爲めに我が子を死なす。（ナ變）

留守番として下男を居らす。（ラ變）

使役（尊敬）

さすは四段・ナ變・ラ變以外の動詞の未然形に附く。

毎朝五時に起きさす。（上二段）

選手に金的を射さす。（上一段）

弟も妹も共に來さす。（カ變）

しむは總べての動詞の未然形に附く。

英語を學ばしむ。（四段）

塵芥を捨てしむ。（下二段）

各自をして自由に活動せしむ。（サ變）

口尊敬の助動詞す・さす・しむも亦使役のす・さす・しむと同様に附く。

希望

六　希望　まほし

希望の助動詞の中、**まほし**は總べての動詞の未然形に附く。

動詞の連用形に附く助動詞

推量

時

人々はみなかくあらまほし。（ラ變）

〔三〕**動詞の連用形に附く助動詞**　動詞の連用形に附く助動詞は、推量・時・希望の三種である。

一　推量　けむ

推量の助動詞の中、**けむ**は總べての動詞の連用形に附く。

かの旅人はいづち行きけむ。（四段）

二　時　き・けり・つ・ぬ・たり

時の助動詞の中、**き・けり・つ・ぬ・たり**は動詞の連用形に附く。

家康は辛苦の權化なるかの觀ありき。（ラ變）

彼は三度都に上りけり。（四段）

苦心の菊花いま咲き出でつ。（下二段）

時は矢の如く過ぎ去りぬ。　（四段）

池の蓮の花咲き始めたり。　（四段）

○きがカ變・サ變の動詞に附く場合は左の如き特殊な用法がある

一　カ變の動詞に、きは直接附かない。但しきの變化したし・しかは附く。

二　サ變の動詞に、きは普通の法則通り連用形につく。但しきの變化したし・しかも、その未然形につく。

活用	未然	連用
カ變	來（こ）し／しか	來（き）し／しか
サ變	爲（せ）し／しか	爲（し）き

語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令
來	こ	き	く	くる	くれ	こよ
爲	せ	し	す	する	すれ	せよ

○ぬはナ變の動詞には附かない。

三　希望　たし

希望の助動詞の中、たしは總べての連用形に附く。

動詞の終止形に附く助動詞

打消

希望

推量

夏は海に行きたし、山も見たし。　（四段・上一段）

〔四〕動詞の終止形に附く助動詞　動詞の終止形に附く助動詞は、打消・推量・咏嘆の三種である。

一　打消　まじ

打消の助動詞の中、まじは動詞の終止形に附く。

奥山はまだ花も咲くまじ。　（四段）

○まじはラ變の動詞に連る場合に限つてその連體形に附く。

「彼ならば破るゝことはあるまじ。」

二　推量　らむ・らし・べし・べかり・めり

推量の助動詞の中、らむ・らし・べし・べかり・めりは動詞の終止形に附く。

夜半にや君がひとり行くらむ。　（四段）

み山には霰降るらし。　（四段）
紅葉亂れて流るめり。　（下二段）
古への人の心も尋ぬべし。　（下二段）
更に廣く見るべかりき。　（上一段）

○「右にあげた五語は、ラ變の動詞に連る時に限り、その連體形に附く。「有るらむ」「有るらし」「有るめり」「有るべし」「有るべかりき」などである。

三　咏嘆　なり

咏嘆の助動詞の中、**なり**は動詞の終止形に附く。

秋の野に人まつ虫の聲すなり。　（サ變）

○これを指定のなりと混同してはならぬ。指定のなりは體言または動詞の連體形に附く。

「東京は日本の首府なり。」「雲間に富士も見ゆるなり。」

咏嘆

動詞の連體形に附く助動詞

指定

比況

〔五〕**動詞の連體形に附く助動詞**　動詞の連體形に附く助動詞は、指定・比較の二種である。

一　指定　なり

指定の助動詞の中、**なり**は總べての動詞の連體形に附く。

釣絲の鳴るは魚の觸るゝなり。　（下二段）

○指定のなりはまた體言の下に附く。「東に見ゆるは筑波山なり。」

○指定の助動詞はなりとたりであるが、たりはみな體言の下に附き用言の下には附かない。

二　比況　ごとし

ごとしは動詞の連體形に附く。

櫻の花の散るは雪の降り亂るゝ如し。　（下二段）

○ごとしは助詞の「が」にもつく。

「山上の空氣水の如し。」「有れども無きが如し」

動詞の已然形に附く助動詞

動詞・助動詞接續法則表

〔六〕動詞の已然形に附く助動詞　動詞の已然形に附く助動詞は時のりだけである。

時　り

りは四段・サ變の動詞にのみ連り、四段の已然に附く。

老木の枝に花咲・けり　（四段）

以上は動詞と助動詞との連續の法則を述べたのであるが、これを一括して表にて示せば左の通りである。

未然	未然形に附くもの	動詞	助動詞
問は・る・ら・る（受身・可能・尊敬） 尋ね・す・さ・す（使役・尊敬） 笑は・む（心せ）（り）（時） 尋ね・し・む			
連用	笑ひ	動詞	
連用形に附くもの	け・き・け・つ・り・ぬ・たり（時） けむ（推量）	助動詞	
終止	笑ふ	動詞	
終止形に附くもの	ら・ら・む・べ・し・べ・か・り・め・り（推量）	助動詞	
連體	笑ふ	動詞	
連體形に附くもの	なり（指定） 如し（比較）	助動詞	
已然	笑へ	動詞	
已然形に附くもの	り（時）	助動詞	
笑は・ま・し（推量） 笑は・む（心せ）（り）（時） 笑は・ず・ざり・じ（打消） 笑は・ま・ほし（希望） 笑は・た・し（希望） 笑は・ま・じ（打消） なり（咏嘆）			

○右の表中に●印を附したものは、特別の用法あるものである。例へば四段・ナ變・ラ變の未然形につき他の活用にはつかぬといふ特別の用法があるが、むは何れの動詞の未然形にもつくから特別の用法はないと見るのである。

助動詞相互の接續

〔七〕助動詞相互の接續　助動詞が助動詞に附く場合にも、動詞に附いたと同じ樣に一定の方則がある。例へば

學ぶ　しむ　らる　べし　なり

といふ五語をつゞける場合に、このまゝ連ねたのでは意味を

なさぬ。これを

學ば（未然）　しめ（終止）　らる（連體）　べき（終止）　なり

とすれば始めて完全に意味を表はすことゝなるのである。

助動詞が助動詞に附く法則は、助動詞が動詞に附く場合と同様の法則によるのである。即ち動詞の未然形に附いた助動詞は、やはり助動詞の未然形に附き、動詞の連用形に附いた助動詞はやはり助動詞の連用形を受けるのである。かくの如くすべて動詞に附く場合と同じ様に考へればよい。

○前にあげた學ばしめらるべきなりについて、助動詞相互の連續を見るにらるは動詞の未然形に附く語であるから、助動詞に附く場合もその未然形に附かねばならぬ。それでしむの未然形しめに附いてゐる。次にべき（べし）は動詞の終止形に附く語であるから、助動詞に附く場合もやはりその終止形からしなければならぬ。それ故らるの終止形らるに附いてゐるのである。またなりは動詞の連體形に附く語であるから、助動詞に附く場合もやはりその連體形べきに附いてゐるのである。

練習　六

一、左の文中の用言の接續を説明すべし。

1 秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる。

2 ある時は花の都にもあきにけり。

3 日本國民が全一體として結合せるも、島國たるその地位に影響せられしこと少からざるべし。

4 世に天禀の才といふことなきにあらねど磨かずば玉も瓦礫に等しかるべし。

二、次の文中に誤あらば正し、且、その理由をいへ。

1 この一隊はよく戰ひて國家の爲めに皆命を捨てり。

2 この處に塵芥捨つるべからず。
3 陳列の繪畫に手を觸るゝべからず。
4 切符なきものは入場するべからず。
5 頑强なる敵も遂に白旗を揭げり。
6 子供の好める品を取らさす。
7 明日は雨も降りまじ。
8 恐らく彼は今日も來るまじ。
9 峰の老松幾代か經るらむ。
10 彼はよく勉强したる功あらはれて試驗に合格せり。

口語助動詞の接續

第七章　口語助動詞の接續

〔一〕口語助動詞の接續

動詞と口語の助動詞の接續も、文語に於ける場合とほゞ相似たものがある。左に口語の助動詞の接續の法則を說明しよう。

動詞の未然形に附く助動詞

打消

〔二〕動詞の未然形に附く助動詞

一　打消　ぬ　ない・まい

ぬ・ないは動詞の未然形に附く。

私はまだそこまでは讀まぬ。

僕はまだ展覽會を見て居ない。

○右のないはサ變の活用に對してはしにのみつゞきせには附かない。「勉强しない」が正しく「勉强せない」は誤である。

まいは四段活用の終止形を受け、四段以外の未然形に附く。

但しサ行變格の動詞には「し」に附く。

彼はそのやうな事は言ふまい。

惡いものは決して見まい。

僕も決してしまいと思ふ。

時

二　時　う・よう

うは四段活用の未然形に附く。

間もなく花も咲かう。

ようは四段活用以外の未然形に附く。

やがて日も暮れよう。

推量

三　推量　う・よう

う・ようの接續は時のう・ようと同じ法則による。

受身

四　受身(可能・尊敬)　れる　られる

れるは四段活用の未然形に附く。

雀が鷹に追はれる。

られるは四段活用以外の未然形に附く。

生徒が先生に褒められる。

使役

動詞の連用形に附く助動詞

時

尊敬

○可能・尊敬のれる・られるも右と同様である。

五　使役　せる・させる

せるは四段活用の未然形に附く。

好きな品を取らせる。

させるは四段活用以外の未然形に附く。

塵を溝に捨てさせる。

〔三〕動詞の連用形に附く助動詞

一　時　た

たは總べての動詞の連用形に附く。

僕も上高地に行つて見た。

二　尊敬　ます

ますは總べての動詞の連用形に附く。

夏休には山へ行きたいと思ひます。

三　希望　たい

たいは總べての動詞の連用形に附く。

早く故郷へ歸りたい。

〔四〕動詞の終止形に附く助動詞

一　打消　まい

まいは四段活用の終止形を受ける。

花はまだ咲くまい。

二　推量　らしい

らしいは總べての動詞の終止形に附く。

時々休みがあるらしい。

〔五〕動詞の連體形に附く助動詞

希望

動詞の終止形に附く助動詞

打消

推量

動詞の連體形に附く助動詞

指定

比況

口語の助動詞相互の接續

一　指定　だ・ですは總ての動詞の連體形に附く。

やがて冬も來るだらう。

やがて冬も來るでせう。

ロだ・ですが直接に動詞の連體形を受けるのはその未然形だけである。その他の形は助詞のを動詞との間にはさむ。「讀むのだ。」「讀むのです。」の類である。

二　比況　やうだ・やうです・やうな

やうだ・やうですは總ての動詞の連體形に附く。

恰も雪が降るやうだ。

まるで繪を見るやうです。

〔六〕口語の助動詞相互の接續　口語の助動詞が相互に接續す

る場合にも、文語の助動詞相互の接續の場合と同じ樣な法則がある。

彼はさう思はせたくないらしい。

○右の例でたくは連用につく助動詞であるから、せといふ連用形につき、ないは未然形につく助動詞であるから、たくといふ未然形につき、らしいは終止形につく助動詞であるから、ないといふ終止形について居るのである。かく二つ以上の口語の助動詞が重なつて附く場合にもその順序に一定の法則がある。

練習七

次の文中に於ける助動詞の接續を説明せよ。

1 富士山は雲に鎖されて見えませんでした。

2 村の青年たちが修養に骨を折つてをられるのを嬉しく思ひます。

3 後から追ひかけられると何だかずつと追ひ拔かれるやうな氣がするものだ。

4 貴下の辯論に感動して私は始めて辯護士にならうと決心したのであります。

5 兵隊にはなつたものの、私はこれまで荒つぽい仕事をしたことはなかつた。中學にゐるころは繪を描く外に友だちと雜誌をこしらへたりした。鐵棒などにぶらさがつたことはただの一度もなかつた。

第八章　助詞の用法

〔一〕助詞の用法　助詞は所謂テニヲハと稱せられるもので、日本語特有のものである。そして其の用法もさまざまであつて、思想表現には大切な役目をなすものである。

助詞の種類

〔三〕**助詞の種類**　助詞はこれを三種に分類することが出來る。

第一類は體言（又は體言の資格をもつ用言）に附くもので、これに屬する助詞は

が・の・を・に・へ・と・より・にて　（文語）

が・の・を・に・へ・と・より・から・で　（口語）

第二類は用言（少數のものは用言以外）に附くもので、これに屬する助詞は

ば・ど・ども・とも・が・に・を・て・ながら・つゝ　（文語）

ば・と・から・ので・けれども・ても・が・のに・し・て・ながら　（口語）

第三類は第一類第二類以外の助詞で、種々の語に附くものをいふ。その主なる助詞は

は・も・なむ・こそ・ぞ・か・や・だに・さへ・すら・し・のみ・ばかり

など・まで・な・な……そ・ばや・なむ・がな・かな・かし・よ・や・な　（文語）

は・も・こそ・ぞ・か・さへ・でも・ばかり・だけ・ぐらゐ・など・まで

な・よ・や・の　（口語）

以上は助詞の大體であるが、今こゝには右の助詞の中で、特に注意すべき用法あるものを擧げて說明しよう。

〔三〕**係りの助詞**　**ぞ・なむ・や・か・こそ**

係りの助詞

ぞ
なむ
やか

係結

普通の文は、用言の終止形で文を結ぶのが通例であるが、上に**ぞ**或は**こそ**などの語が來ると、その文の結び方は異つた形をとる。これらの關係を**係結**といふのである。

口語には係結はない。

一　ぞ・なむ・や・かの係り詞

ぞ・なむ・や・かの係りの助詞が上に來る場合には下を

用言の連體形で結ぶ。

名をば蟬丸とぞいひける。

式部卿の宮の雜色にてなむありける。

これをしも歎かぬ人やある。

何ものかこれにたとふべき。

こそ

二　こその係り詞

こその係りの助詞が上に來る場合は、下を用言の已然形で結ぶ。

夜こそいたく更けぬれ。

蟹の歩みに譬ふべきものこそなけれ。

條件の助詞

〔四〕　條件の助詞

明日雨降らば運動會は延期せむ。

假定の條件

ば

とも

右の文に於て「雨降らば」といふ句は全文の條件となつて、その條件のもとに「運動會は延期せむ」といふ事實を表したものである。それは助詞ばがある爲めに、條件となるべき意味が表はれたのである。かくの如く條件を表はす用法の語を、**條件の助詞**といふ。これには假定・確定の二種がある。

一　假定の條件の助詞　ば・とも

ばは用言の未然形に附いて假定の條件を表はす。

雨降らば旅行は延期せむ。

波荒くば出帆を見合はせむ。

ともは動詞・助動詞の終止形に附き、形容詞の未然形に附いて假定の條件を表はす。

いかに言ふとも彼はその意を解せざらむ。

確言の條件

ば

ども

ども

戰敗れたりとも我は悔いじ。

いかに苦しくとも堪へ忍ばむ。

ともは古くは「と」とも用ひられた。またともの代りにもを用ひることもある。ともはまた動詞・助動詞の連體形を受けることがある。

二　確定の條件の助詞　ば・ど・ども・が・を・に

ばは用言の已然形に附いて確定の條件を表はす。

雨降れば花も多くは落ちぬ。

時なほ早ければ人も集まらず。

ど・どもは用言の已然形に附いて確定の條件を表はす。

秋來れど暑さ去らず。

秋來れども暑さは去らず。

が

を

に

口語の條件の助詞

ば

て

も

風強けれども寒からず

が・を・には用言の連體形に附いて確定の條件を表はす。

年は暮れしが業は成らず。

年老いたるを意氣のみは衰へず。

少年は老い易きに業は進まず。

三　口語の條件の助詞　口語の條件の助詞には、ば・て・も・けれど・けれども・が・と・ので・のに・から等がある。

ばは用言の已然形(假定形)に附いて假定の條件を表はす。

秋が來れば紅葉も色づかう。

雨が降れば紅葉も早く散らう。

てもは用言の連用形に附いて假定の條件を表はす。

言つても言はなくても同じ事だ。

けれど
けれども

けれど・けれどもは用言の終止形に附いて確定の條件を表はす。

冬は來たけれど寒くはない。
皆がさう言ふけれども僕には信じられない。

が
と
のので
のに
からの用例は次のやうである。

行つて見たがつまらなかつた。
秋が來ると風の音がかはる。
風が吹くので秋の感じが深い。
あれほど勉強したのに結果は駄目だつた。
風が寒いから雪になるのであらう。

疑問・反語の助詞
疑問の助詞

〔五〕疑問・反語の助詞

一　疑問の助詞　や　か

や
か

口語の疑問の助詞

やは用言の終止形に附き、**か**はその連體形に附いて疑問の意を表はす。

汝は遲刻したることありやなしや。
汝はこの問題を解し得たりや。
汝は遲刻したることあるかなきか。
汝はこの問題を解し得たるか。

○やは「彼は富むや」「夏の旅は面白きや」などのやうに用言の連體形に附くこともある。
○や・かが用言の前におかれる時は、文語では係結の關係を生ずる。
○「誰をか忠臣といふべき。」のやうに、何・誰の如き不定稱の代名詞の後におく疑問の助詞は必ずかを用ひる。

口語に於ける疑問の助詞は**か**である　**か**は文の終りに附

く。

富士山に登つたことがあるか。

そんな話もあつたか。

二　反語の助詞　や・か・やは・かは

反語の助詞

や　か

や・かは斷定の意を強く表はすために、疑問の意から轉じて反語の意に用ひる。

破らずやあらむ。

何をか歎くべき。

やは　かは

やは・かはは、**や・か**に感動の助詞**は**の附いたもので、**や・か**よりは一層強い反語の意を表はす。

破らずやはあらむ。

たとひ小敵たりとも輕んずべきかは。

○反語の助詞や・やは・か・かはの用法は、疑問の助詞や・かと同樣である。

口語の反語の助詞は、文語と同じくかを用ひる。

僕が何でそんな馬鹿なまねをするものか。

口語の反語の助詞　か

〔六〕願望・禁止の助詞

願望禁止の助詞

願望の助詞　なむ　ばや　がな　がも

一　願望の助詞　なむ・ばや・がな・がも

なむ・ばやは用言の未然形を受け、**がな・がも**は助詞もを受けて願望の意を表はす。

我庵を訪ね來る人もあらなむ。

便あらば彼の國へも渡らばや。

さらぬ別れのなくもがな。

永久に散らざる花もがな。

禁止の助詞
な

な…そ

二　禁止の助詞　な・な…そ

なは動詞の終止形に附き、また受身・使役などの助動詞の終止形に附いて動作を禁止する意を表はす。但、ラ行變格活用の動詞ではその連體形を受ける。

ゆめ〳〵父の教を忘るな。

油斷して敵に打たるな。

おの〳〵方御油斷あるな。

な…そはその間に動詞の連用形を挿み禁止の意を表はす。

知らざる人になる語りそ。

な…その間には動詞の連用形をはさむのが定法であるが、カ變・サ變の動詞に限つてその未然形をはさむ。

吹く風をなこそ。

この關と思ふ。

指示・並列の動詞
指示の助詞
と
に
へ
より
まで

父の名を汚すことなせそ。

〔七〕指示・並列の助詞

一　指示の助詞　と・に・へ・より・まで・のみ・ばかり

とは體言または用言の終止形に附き、或は言ひ切る語の下に附いて、上の語句を指し示す意を表はす

かくの如きを駿馬といふ。

谷の鶯春來と告ぐ。

死傷者三萬に達したりといふ。

に・へ・より・までは體言または用言の連體形に附き指示の意味を表はす。には場所を指示し、へは方向を指示する。より は起點を指示し、までは到着點を指示する

東京に長く留る

船は北へ北へと急ぐ。

新學期は昨日より始まれり。

東京より横濱まで走り續けたり。

○口語では、にとへとは同じ意味に用ひることが多い。

○よりはまた「言はぬは言ふよりまさる」のやうに比較の基準を示すこともある。

○口語では、起點を示すよりはからとなるのが普通である。

のみ・ばかりは體言または用言の連體形に附いて、事物の意味を限定して指示する。

花のみ我が友なり。

心ゆくばかりさまよひぬ。

○ばかりには二つの意味がある。一は程度を示すものであり、一はそれと限るものである。前者は口語のぐらゐと同じく、後者

は口語のだけと同じである。

○以上の外、指示の助詞に屬するものに、だに・さへ・すらがある。だには體言に附いて、一つのものを特に取り立てゝいふ場合に用ひ、すらはほゞこれと同じ意味に用ひるがやゝ意味が弱い。さへは主として體言に附いて有る上に更に添ひ加はる意を表はす。

忙がはしくて入浴だにせず。

犬すら恩を知る、況んや人間をや。

赤貧洗ふが如きに病さへおこりぬ。

○文語のだには口語のさへと、文語すらは口語のでもと同樣な意に用ひる。

練習　八

一、左の文中に誤あらば訂正し、且その理由をのべよ。

1 當方一同無事に候はゞ御安心下され度候。
2 若し明日雨天に候へば遠足は中止と御承知下され度候。
3 國家の安危を擔ふ身のこゝにて御最後あるべくや。
4 ひとりゐのこの宿に今宵は月なむこよなき慰なれ。
5 雪いかに深きともいかでこの旅行をやむべきやは。
6 五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞすれ。
7 あはれ君こそこの國の運命を擔ふ人なる。
8 人はいざ心もしらず故郷は花ぞ昔の香ににほひけり。
9 艱難汝を玉にすると古人もいへる。
10 かゝる時に輕々しき事なしそ。
11 今日は來るな、明早朝來よ。
12 たとへ破るれども戰はやめじ。
13 成績良しとも決して油斷するな。
14 敵兵來らば來れ、恐るべきやは。

15 たとひ人には知られざるもわが心に恥ぢざるべきや。
16 七重八重花は咲けども山吹のみの一つだになきぞ悲しや。
17 恩に報ふに仇を以てするとや言はん。
18 病氣せざるやう心懸くが大切なり。
19 折々梟の聲淋しげに聞ゆのみ。
20 恰も機械水雷の爆發すにも似たり。

二、左の文を文語文に改めよ。

1 國をあげて戰つてゐる時に私だけが儲ける理由はありません。
2 彼がどうして島から逃れ出て來たかを聞かせよう。
3 これぐらゐ出來れば結構だ。
4 犬でさへ恩を知つてゐる、まして人間は知らないではすまない。
5 君さへ承諾すれば會は成立する。

單語の合成

疊語

第九章　單語の合成及び音韻の轉化

〔一〕**單語の合成**　單語が二つ以上合して一つの語をつくることを**單語の合成**といふ。單語の合成には**疊語**・**熟語**・**接頭語**・**接尾語**の四種がある。

○合成した單語を**複合語**ともいふ。

〔二〕**疊語**　全く同一の單語が重つて出來たもの。

一　名詞の重複　家々。村々。國々。山々。谷々

二　代名詞の重複　我々。誰々。それ〴〵。おの〳〵。

三　形容詞の語幹の重複　輕々し。重々し。長々し。若々し。

四　副詞の重複　ゆめ〳〵。靜かに〳〵。たゞ〳〵。

熟語

接頭語

五　感動詞の重複　あはれ〳〵。いざ〳〵。いで〳〵。

〔三〕**熟語**　二つ以上の異なる單語が結びついて出來たもの。

一　熟語の名詞　朝日。雪降。買物。飛込。

二　熟語の動詞　物語る。かへりみる。近寄る。

三　熟語の形容詞　奥ゆかし。有り難し。暑苦し。

四　熟語の副詞　誠に。何とぞ。決して。成るべく。たゞに。

五　熟語の接續詞　且又。然れども。但し。しかのみならず。

〔四〕**接頭語**　單獨には用ひられず、ある語の上に附いて、これらに或意味を加へ、又は意味を強めるものを**接頭語**といふ。

一　名詞に附くもの　み山。はつ春。ま玉。お顏。

二　動詞に附くもの　うち見る。かき抱く。たなびく。ほの見ゆ。

三　形容詞に附くもの　小高し。いち早し。たやすし。

〔五〕**接尾語**　單獨には用ひられず、ある語の下に附いて、これらに或意味を加へ、又は意味を強めるものを**接尾語**といふ。

一　名詞に附くもの　友だち。童ら。神樣。百番。

二　代名詞に附くもの　君ら。私ども。あなた樣。

三　他の語の下に附いて動詞を作るもの　夏めく。汗ばむ。學者ぶる。

四　他の語の下に附いて形容詞を作るもの　古めかし。學者らし。露けし。

五　他の語の下に附いて副詞を作るもの　手づから。見がてら。うれしげに。

接尾語

音韻の轉化

連濁

轉音

〇接頭語と接頭語とを合せて**接辭**といふ。

〇接頭語はこれを附けても、その語の品詞は變らない。接尾語はこれをつけるとその語の品詞がかはるものと、かはらないものとがある。

〔六〕**音韻の轉化**　單語が合成される場合に、音韻が轉化するものがある。それには次の三種がある。

一　**連濁**　單語の合成の場合に、下の語が清音から濁音に變るものをいふ。

隅々（すみずみ）　石橋（いしばし）　物語る（ものがたる）

二　**轉音**　單語の合成の場合に、上の語の尾音が他の異なる音に變化するものをいふ。

苗代（なはしろ）　白雪（しらゆき）　船板（ふないた）

連濁と轉音

三　連濁と轉音

連濁と轉音とが一つの單語の中に現はれるものをいふ　酒樽（さかだる）　雨乞（あまごひ）　船橋（ふなばし）

練習九

左の文中の單語の合成を説明せよ。

1 みよし野の山の秋風さ夜ふけてふるさと寒く衣うつなり。
2 さよふけてほの暗きみあかしの影ものさびし。
3 怪しき物かげはかき消すごとく消え失せたり。
4 我は海の子白波のさわぐ磯邊の松原に烟たなびく苫屋こそ我がなつかしき住家なれ。
5 「おい」と聲をかけたが返事がない。軒下から奥を覗くと煤けた障子が立ててある。向側は見えない。五六足の草鞋が淋しさ

品詞の轉成

うに庇から吊されて屈託氣にふらり〳〵と搖れる
6 しばらくを三間うちぬきて夜ごと〳〵兒らがあそぶに家わきかへる。
7 道には私たちの外に歩いてゐる者もないが、向ふから土地の人らしく子供など連れて太秦の寺の方へやつて來る者もあつた。「もうそろ〳〵始まるのでせう。」私たちも引きかへすことにした。

第十章　品詞の轉成

〔一〕品詞の轉成　一つの品詞が、その意味や用法などの變化するに隨つて他の品詞となることを**品詞の轉成**といふ。品詞の轉成には次の四種がある。

轉成の名詞・轉成の代名詞・轉成の副詞・轉成の接續詞。

轉成の名詞

〔二〕 **轉成の名詞**

一　動詞から轉じた名詞

山霞む。……山の霞。

淋しく笑ふ。……淋しい笑。

○動詞は右のやうに多くその連用形から名詞に轉ずる。しかしすまふ・向ふの山のやうに終止形から轉ずるものもある。

二　形容詞から轉じたもの

國遠し。……遠くの國。

からし。……芥子

○右の例のやうに形容詞はその連用形から名詞に轉じ、またその終止形から名詞に轉ずる。この外に、深さ・輕み・面白げのやうにその語幹にみ・さ・げのやうに接尾語をつけて名詞とする場合もある。

轉成の代名詞

三　感動詞から轉じたもの

あはれいとし子よ…秋のあはれは筆にも盡しがたし。

〔三〕 **轉成の代名詞**

君の恩を忘れず……君、遊びに來たまへ。

○右の外、名詞から代名詞に轉ずる事が多い。貴君・閣下・足下・私・小生・僕などがそれである。

轉成の副詞

〔四〕 **轉成の副詞**

一　名詞から轉じたもの

本日始む。昨日歸鄉した。

二　動詞から轉じたもの

餘り喜ばず。つまり失敗だ。

三　形容詞から轉じたもの

水清く流る。風強く吹く。

○形容詞の連用形は多く副詞に轉ずる。

轉成の接續詞

〔五〕 **轉成の接續詞**

一　名詞から轉じたもの　一同無事に候間。時下寒冷の候に候處。

二　動詞から轉じたもの　陸軍及び海軍。東京及び京都。

三　副詞から轉じたもの　山また山を越ゆ　雨か霰かはた雪か。

後編　文章論

第一章　文の主成分と其の構成

〔一〕文　「友來る。」「雪白し。」「彼は日本軍人だ。」のやうに、二つ以上の言葉をつゞけて、一つの纏つた思想を表はすものを文といふ。文の終りでは必ず言葉がきれる。

文

〔二〕主語　文は次のやうな種々なる成分から成立つものである。

一　友來る。

二　雪白し。

主語の構成

三　彼は日本軍人だ。

右の文は、一は「友がどうするか」を表はし、二は「雪がどうあるか」を表はし、三は「かれは何であるか」を表はしてゐる。言ひかへれば右の文は「友」「雪」「彼」について其の狀態や動作を述べたものでは「友」「雪」「彼」はそれ〴〵その文の主となつてゐる題目である。かく文の主となるものを**主語**といふ。

主語は主として**體言**から成る。

父東京より歸る。

彼第一着となる。

○主語となる名詞・代名詞には種々の助詞がつく事が多い。殊に口語ではむしろ助詞のつくのが普通である。

東京は日本の首府なり。　風が強く吹く

述語

述語の構成

○主語は體言の外に、用言の連體形が名詞のやうに用ひられ、これに助詞がついてなる場合がある。

降るは雨か。　悲しきは人の身なり。

〔三〕**述語**

前項にあげた例の中、(一)來る(二)白し(三)日本軍人だは、それぞれ友・雪・彼はの主語に就いて、その狀態や動作を述べたものである。かく主語について叙述する語を**述語**といふ。

述語は主として**用言**から成る。

一　水清く流る。

二　吹く風いと涼し。

○述語は主として動詞・形容詞から成るが、その場合に、用言が單獨に用ひられることもあるが、又助動詞や助詞が附く事もある。

鳥啼けり。　父も歸り來るべし。

客語

客語の構成

○右の外、名詞・代名詞も助動詞や助詞が結びついて述語となることがある。

日本は神國なり。　第一着になつたのは誰か。

〔四〕客語

一　父子を叱る。

二　生徒鉛筆を買ふ。

右の文で、叱る・買ふはいづれも他動詞であつて、子を・鉛筆をはそれ〴〵この他動詞の目的となる物を表はす語である。このやうに他動詞が述語となつてゐる時に、その述語となつてゐる動詞の目的物を示す語を客語といふ。

客語は主として體言から成る。

○客語は通常をといふ助詞を伴ふ。しかし「馬(を)つなぐべからず」のやうにこのをを省略する場合もある。

補語

補語の構成

○「良きを採り惡しきを捨つ」のやうに用言の連體形にをのついたものが客語となる場合がある。

〔五〕補語

一　父子に家を讓る。

二　氷水となる。

右の文は、もし子に・水とといふ語を省くと文の意味が不完全になる。かやうに主語・述語・客語以外の語で、文の意味を完全にする上に必要な語を補語といふ。

○こゝに擧げた例はみな述語が他動詞の場合であるが、述語が自動詞である場合にも補語を要することがある。

子供等公園に遊ぶ。　父自動車に乘る。

○形容詞を述語とする文にも、補語を要する場合がある。

紅葉春の花より美し。　心鐵よりも堅し

○述語に使役・受身の助動詞を含む場合は、必ず補語を要する。

子父に叱らる。　教師生徒をして字を書かしむ

補語は主として體言から成る。

父子に家を讓る。

教師生徒をして英書を讀ましむ。

○補語は通常に・と・より・をしてなどの助詞を伴ふ。

○補語は體言の外に、用言の連體形に助詞のついたものがある。

道は近きにあり。　恩澤遠きに及ぶ。

文の主成分

〔六〕**文の主成分**　主語・述語・客語・補語の四を**文の主成分**といふ。

文の成分には以上の四の外に修飾語がある。

文主

〔七〕**文主**

東京は人口多し。

右の文で、多しが述語であることは疑ひないが、その述語の主語は東京でなく人口である。そして「人口多し」といふ一つの文が、また東京を主語として、その述語になつてゐるやうな形をとつてゐる。これまた國語の文に特有なもので、この「東京は」のやうなものを**文主**となづける。

總主

○文主はまた**總主**とも呼ばれる。

練習　一〇

次の文の主成分を指摘せよ。

1 兄は佛蘭西語を學ぶ。
2 艱難汝を玉にす。
3 海上は穩にして鏡の如し。
4 讀むと聞くとは自ら感じを異にす。
5 山は高きを尊しとせず。

6 我が日本帝國の將來は青年の双肩にかゝる。
7 攻むるは易く守るは難し。
8 鳥が鳴く。山が青葉につゝまれた。
9 彼は何ものだ。
10 父は兄に佛典を讀ませた。

第二章　修飾語

〔一〕修飾語

一　涼しき風吹く。

二　梅美しく咲けり。

三　飛行機晴れたる空に飛べり。

右の例で一の涼しきは主語風を修飾し、二の美しくは述語咲けりを、三の晴れたるは補語空にをそれぞれ修飾してゐる

修飾語

かやうに文の主成分に附いてその意味を修飾する語を**修飾語**といふ。

修飾語の種類

修飾語は、その修飾される語の種類によつて、形容詞的修飾語と副詞的修飾語との二種に別たれる。

形容詞的修飾語

一　形容詞的修飾語　主語・客語・補語に附く修飾語は、主として形容詞または形容詞のやうに用ひられるものである。それ故これを**形容詞的修飾語**といふ。

形容詞的修飾語の構成

一　近き森遠き山一目に見渡さる。

二　やさしき母病める子をいたはる。

三　猫座敷の縁に眠る。

○形容詞的修飾語は主として三種から構成せられる。

一、形容詞或は動詞の連體形。白き雲・清き水・散る花・泣く人

二、動詞に助動詞の連體形の附いたもの。　病める人・曇りたる空

三、體言に助詞の・がなどが附いたもの。　秋の風・君が代・冬の日

形修

○形容詞的修飾語は略して**形修**ともいふ。

副詞的修飾語

二　副詞的修飾語

述語につく修飾語は主として副詞又は副詞のやうに用ひられるものである。それ故これを**副詞的修飾語**といふ。

一　風甚だ強し。

二　船漸く近づく。

三　汝等は一層注意してこの事を行ふべし。

副詞的修飾語の構成

○副詞的修飾語は主として次の三種から構成せられる。

一、副詞から成るもの。　清く流る。　甚だ盛なり。

二、用言に助詞の附いたもの　頗る遺憾なり。　行くとも甲斐あらじ。　努力して成功す。

三、體言に助詞の附いたもの。　年々に弱る　遠方より來る。

文の成分の解剖

〔三〕文の成分の解剖

文は、既に述べた如く主語・述語・客語・補語・修飾語の五つを以て成立するので、文をその成分に解剖するには、先づ**主語**と**述語**とを考へ、次に**客語**と**補語**とを求め、それらの各〻に附いた**修飾語**を考へるのが順序である。

○文の成分に解剖するには、例へば

建全なる精神は健全なる身體に宿る。

といふ文に於て、先づ主語は精神であり、次に述語は宿るである。第三に客語は本文にはないから、補語をみると身體にがそれに當る。殘つた部分はみな修飾語で、上の健全なるは主語の修飾語で

あり、下の健全なるは補語の修飾語であつて、共に形容詞的修飾語である

練習　一一

次の文をその成分に解剖せよ。

1 ナポレオンは、稀なる豪傑なり。
2 昨夜來の雪全くやみて、朝日美しく照り輝きぬ。
3 瓶にさす藤の花房短かければ疊の上にとどかざりけり。
4 清く涼しき風かなたの海上より吹き來る。
5 荒れ果てたる、住家は早く狐狸の臥床となれり。
6 彼の一生は頗る滑稽なる逸話に富めり。
7 正確なる知識は鋭利なる機械の如し。
8 私は切符を買ひに停車場へ行つた。
9 雪國の兎の毛は秋までは黄色ですが、冬になると眞白になりま

す。
10 これはほんとに綺麗な繪だ。

第三章　文の成分の位置

主語・述語の位置

〔一〕主語・述語の位置　主語は上に、述語は下に位置するのが常態である。

一　猫眠る。（主語・述語）
二　飛行機來る。（主語・述語）

客語・補語の位置

〔二〕客語・補語の位置　客語と補語とは主語と述語との間に位置するのが常態である。

一　父財産を讓る。（主語・客語・述語）
二　兄都に上る。（主語・補語・述語）

三　我は故郷に書を送る。（主語・補語・客語・述語）

○客語と補語とが一つの文中に現はれる時は、その位置は何れが先になつても差支ない。前の例三で「我は書を故郷に送る」と書いてもよいのである。

修飾語の位置

〔三〕**修飾語の位置**　形容詞的修飾語は修飾される語の上にあり、副詞的修飾語は主語のすぐ下に位置するのが常態である。

月（形修）靜かなる湖面に（形修）清き影をうつせり。

父（副修）大いに子を激勵す。

文の成分の倒置

〔四〕**文の成分の倒置**　以上にあげた文の成分の位置は、國語の表現に於ける常態で、普通の場合はこの順序によるのが自然的な表現である。しかし特に文の意味を強めたり、または或

る語に注意を惹く必要のある場合には、この普通の順序によらず、その成分を上下に置き換へることがある。これを**文の成分の倒置**といふ。

主語と述語の倒置

文の成分の倒置には、次のやうな種類がある。

一　主語と述語の倒置

行け、我が友。（述語・主語）

客語の倒置

二　客語の倒置

あはれなるかなこの人。（述語・主語）

月花を君は好むや。（客語・主語・述語）

そんな事を誰がいつた。（客語・主語・述語）

補語の倒置

三　補語の倒置

東京より兄歸れり。（補語・主語・述語）

修飾語の倒置

弟には父これを與へざりき。（補語・主語・客語・述語）

四　修飾語の倒置

歌へ子供等勇ましく。（述語・主語・副修）

學べ生徒等いそしみて。（述語・主語・副修）

練習　一二

左の文の成分を常態の位置に置きかへよ。

1 あはれなつかしきかな故郷の山川。
2 思ひきや雪ふみわけて君をみんとは。
3 やよ正行、汝は忘れたるか、父の教訓を。
4 はからざりき、老いたる我の若き君の死に逢はんとは。
5 どこで君はそれを見つけたのか。
6 枯枝に烏のとまりたるや秋の暮。

文の成分の併置

主語の併置

第四章　文の成分の併置と省略

〔一〕文の成分の併置　同一の文の中に、同じ成分が二つ以上用ひられることを**文の成分の併置**といふ。

櫻も桃もみな咲けり。

家康は武將なり、政治家なり。

文の成分が併置せられるには、次のやうな場合がある。

一　主語の併置

兄も弟も共に農業に從事せり。

東京・大阪・名古屋は我が國の大都會なり。

○主語が併置された場合は、それらの主語を一括して一つの主語と見なしても差支ない。

述語の併置

二　述語の併置

種子は發芽し、成長し、繁殖し、枯死す。

平和は喜ぶべく、愛すべく、求むべし。

右は述語を併置した場合である。

客語の併置

三　客語の併置

父は圍碁と謠と盆栽とを愛す。

兄は野球及び蹴球を練習す。

右は客語を併置した場合である。

補語の併置

四　補語の併置

夏は海に山に人を集む。

父は太郎と次郎とに財産を分てり。

右は補語を併置した場合である。

成分の省略

〔三〕**文の成分の省略**　文はその必要な成分が全部備はつてゐるのが原則であるが、文を簡潔にしたり、語調を強めたりするために、文の意味が通ずる範圍内で、成分を省略することがある。これを**成分の省略**といふ。

文の成分の省略には次のやうな場合がある。

主語の省略

一　主語の省略

この土手に登るべからず。（何人も・人々などが略されてゐる。）

公園の樹を愛しませう。（我々は・市民などが略されてゐる。）

○命令の文は主語が省略される場合が多い。

（全隊）前へ進め。　（汝は）更に努力せよ。

述語の省略

二　述語の省略

千里の道も一歩より。（始まる）

さあ、どうぞ。（こちらへお通り下さい。御自由におとほり下さい…等）

客語の省略

三　客語の省略

若し學者あらば、我は（その人を）師とせむ。

君はまだ（その事を）知らないのか。

補語の省略

四　補語の省略

敵は間もなく擊退せられたり。（我軍に・我になどが省略されてゐる。）

お父さんが之を下さつた。（私にが省略されてゐる。）

○文の成分が省略せられる外に、文の成分に結びつく助動詞・助詞などの省略される場合も少くない。

努力は成功の基（なり）。

（我に）敷島の大和心を（如何なるものなるかと）人問はば

（それは）朝日に匂ふ山櫻花（の如しと我は答へむ）。

練習　一三

次の文に、成分の省略又は倒置あらば指摘せよ。

1　陳列の品に手を觸るべからず。

2　信號守れ、車も人も。

3　一秒を急いだために松葉杖。

4　おや〳〵、あんよが出來ますね。えらい〳〵。

5　謂ふ勿れ、今日學ばずして來日ありと。

6　その事はもう一年前から聞いてゐる。

節

句

主語節

第五章　節（句）

〔一〕節　完全なる一つの文が、他の文の一部分となつたものを節といふ。

雪の降るは花の散るに似たり。

右の文に於て「雪の降る」「花の散る」は、共に主語・述語が備つてゐる完全な文であるが、それがこの場合は獨立性を失つて文の一部分となつてゐる。かやうなものを節といふのである。

節には主語節・述語節・客語節・補語節・修飾語節・對立節の六種がある。

○節はまたこれを句と呼ぶことがある。

〔二〕主語節　主語の用をなす節をいふ。

述語節

客語節

補語節

修飾語節

花の美しきは牡丹なり

雪の降るのは面白い。

〔三〕述語節　述語の用をなす節をいふ。

瀬戸内海は波靜かなり。

十和田湖は景色が美しい。

〔四〕客語節　客語の用をなす節をいふ。

父は我が成績惡しきを憂ふ。

庭の櫻は春の來るのを待つてゐる。

〔五〕補語節　補語の用をなす節をいふ。

月日の經つは白駒の隙を過ぐるに似たり。

僕は人の多いのと景色の美しいのに驚いた。

〔六〕修飾語節　修飾語の用をなす節をいふ。

月清き夕、波寄する邊に出づ。

木の葉が蝶が舞ふやうに散つて來た。

○こゝにあげた例の中、前の方は形容詞的修飾語の用をなすもので、これを**形容詞節**といふ。また後の方は副詞的修飾語の用をなすもので、これを**副詞節**と名づける。

〔七〕 對立節　節と節とが對立關係にあるものをいふ。

花咲き鳥歌ふ。

兄は書を讀み弟は字を書く。

練習　一四

次の文中の節につき說明せよ。

1 余は花の美しきを手折れり。

2 君子は人の己を知らざるを憂へず。

3 余は友の來るに逢へり。

4 東京は人口多き都會なり。

5 月落ち、烏鳴き、霜天に滿つ。

6 月清き河原に千鳥かなしく鳴けり。

7 風吹けど寒さ甚だしからず。

8 月日のたつのはまるで夢のやうだ。

9 曉に見る、千兵の大牙を擁するを。

10 水は方圓の器に從ひ人は善惡の友による。

第六章　文の構成上の種類

〔一〕 文の種類　文は構成上から見る分類と、性質上から見る分類との二種がある。構成上からの分類は、單文、複文及重文の三種である。

單文

〔三〕**單文**　主語と述語との關係が、唯一回だけ成立する文を**單文**といふ。單文は節を含まない文である。

花開く。

花美しく開く。

野も山も畑もみな一つの緑に彩られたり。

○單文は右の例のやうに簡單なものと、複雜なものとがあるが、如何に複雜になつても、その主語と述語との關係が唯一回だけ成立するといふ所に特色がある。

複文

〔三〕**複文**　主語と述語との關係が二回以上成立してゐる文を**複文**といふ。複文は少くとも一つは節を含む文である。

水の流るるは快し。

父母は余の卒業せるを喜ぶ。

重文

○複文は節を含んでゐるが、その節は獨立してゐるのではなく、文の一成分の用をなしてゐるのである。

〔四〕**重文**　二つ以上の對立節を含む文を**重文**といふ。

月落ち烏鳴く。

空には飛行機飛び、海には軍艦駛る。

構成上の文の解剖

〔五〕**構成上の文の解剖**　文を構成の上から分類するには、先づその主語となるべき部分と、客語になるべき部分とを見定め、次に文全體に含まれてゐる節を觀察するのである。節を含まなければ單文であり、節を含めば複文となり、その節が對立すれば重文となる。しかし實際の場合は、これらの三種の文が混合して複雜な形として表はれる事が多いのである。

一　人は己の愚なるを知らず。（複文）
　　主語　客語節　述語

二　月落ち、烏鳴き霜天に滿つ。（重文）
　　對立節　對立節　對立節

三　松青く砂白き海岸は長く連る。（重文を含んだ複文）
　　修飾語節　對立節　對立節

○右の例で、一は節を含むから複文であり、二は三つの對立節から成るから重文であり、三は二つの對立節を含んでゐるから、重文を含んだ複文である。

練習　一五

構成上より左の文を類別せよ。

1 秋暮れ冬來る。
2 彼は野球と蹴球と庭球とに長せり。
3 格言に孝は百行の本なりといへり。
4 古の奈良の都の八重櫻けふ九重に匂ひぬるかな。

5 雨風烈しく、道暗くして敵の鬨の聲こゝかしこに聞ゆ。
6 春は來れども寒さ未だ去らず。
7 先生は言葉やさしく諭しました。
8 弟は雨が降るのに傘も持たずに出かけました。
9 ナポレオンの率ゐる五十萬の大軍が、モスコーに着いた時には、十五萬に減つてゐました。
10 住民が姿を隱したので天國のやうに美しい町家はまるで廢墟でした。

第七章　文の性質上の種類

〔一〕性質上の種類

文はその性質上、これを叙述文・疑問文・命令文・感歎文の四種に分たれる。しかし實際の場合は、單純なものは少くて、これらの重複混合したものが多いのである。

叙述文

〔三〕**叙述文**　事實をそのまゝに叙べる文を**叙述文**といふ。

櫻の花咲き初めたり。

東京は東洋一の大都會なり。

海は動き山は靜かなり。

○叙述文はまた平叙文といふ。これには肯定・否定・推量・斷定等種々なる内容のものがある。叙述文は常に動詞・形容詞・助動詞の終止形を以て結ぶ。但係結の場合は連體形若しくは已然形で結ぶ。

疑問文

〔三〕**疑問文**　疑問の意を表はす文を**疑問文**といふ。

君は父母ありや。

東京と大阪は何れが人口が多いか。

○反語の文は意は疑問ではないが、その形からやはり疑問文の一種と見做すことが出來る。「こゝにて御最後あるべしや。」など

命令文

感歎文

意はむしろ強い斷定である。しかしこれを疑問文として取扱つて差支ない。

〔四〕**命令文**　命令又は禁止の意を表はす文を**命令文**といふ。

各員一層奮勵努力せよ。

ゆめ〳〵父母の恩を忘るな。

○禁止は消極的な命令である。

〔五〕**感歎文**　感歎の意を表はす文を**感歎文**といふ。

あはれこよひの月の悲しさよ。

あゝ哀れなるかな。

練習　一六

次の文をその性質上より分類せよ。

1　汝は何故に潮の滿干するかを知るか。

2 僕等は今日上野の櫻を見て來た。
3 己の欲せざる所は人に施すこと勿れ。
4 王侯將相寧んぞ種あらんや。
5 「何といふ美しい月だ。早く來給へ。」と友はしきりに誘ひ立てる。
6 夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづくに月やどるらむ。
7 汝等若し志を遂げんと欲せば、寸刻を惜しみて勉勵すべし。

中等教科文法 上級用 終

附錄

文法上許容スベキ事項

（明治三十八年十二月二日文部省告示第百五十八號）

一 「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用ヰルモ妨ナシ

二 「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

三 過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用ヰルモ妨ナシ

例 火災ハ二時間ノ長キニ亙リテ鎮火セザリシ
金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ

四 「コトナリ」(異)ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用ヰルモ妨ナシ

五 「ヽヽセサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例 手習サス
周旋サス

賣買サス

六「ヽヽセラル」トイフベキ場合ニ「ヽヽサル」ト用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例　罪サル
　　評サル

解釋サル

七「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用ヰルモ妨ナシ

例　最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム
　　上下貴賤ノ別ナク各其地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ

八　佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シ・シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイフベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ

例　唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ
　　攻擊開始ヨリ陷落マデ僅カニ五箇月ヲ費セシノミ

九　てにをはノ「ノ」ハ動詞・助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ

例　花ヲ見ルノ記
　　學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ
　　市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ

一〇　疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞・形容詞・助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ

例　有ルヤ
　　面白キヤ
　　父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ

一一　てにをはノ「トモ」ノ動詞・使役ノ助動詞及受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例　數百年ヲ經ルトモ
　　如何ニ批評セラルヽトモ
　　强ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ

一三　てにをはノ「ト」ノ動詞・使役ノ助動詞・受身ノ助動詞及時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例　月出ヅルト見エテ
　　嘲弄セラルヽト思ヒテ
　　終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ
　　萬人皆其德ヲ稱ヘケルトゾ

一三　語句ヲ列擧スル場合ニ用ヰルてにをはノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限リ最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ

例　月ト花
　　宗教ト道德ノ關係
　　京都ト神戸ト長崎ヘ行ク
　　最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例
　　史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ
　　史記ト漢書ノ列傳トヲ讀ムベシ

一四　上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ

例　誰ニヤ問ハン
　　幾何ナルヤ

　　如何ナル故ニヤ
　　如何ニスベキヤ

一五　てにをはノ「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用ヰルモ妨ナシ

例　何等ノ事由アルモ（アリトモ）議場ニ入ルコトヲ許サズ
　　期限ハ今日ニ迫リタルモ（タレドモ）準備ハ未ダ成ラズ
　　經過ハ頗ル良好ナリシモ（シカドモ）昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ
　　誤解ヲ生ズベキ例
　　請願書ハ會議ニ付スルモ（ストモ　スレドモ）之ヲ朗讀セズ
　　給金ハ低キモ（クトモ　ケレドモ）應募者ハ多カルベシ

一六　「トイフ」トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用ヰル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ

例　イハユル哺乳獸ナルモノ
　　顏回ナルモノアリ

——附錄終——

ニ

た行	だ行	は行	ば行	ま行
落	恥	强	亡	試
ち	ぢ	ひ	び	み
ち	ぢ	ひ	び	み
つ	づ	ふ	ぶ	む
つる	づる	ふる	ぶる	むる
つれ	づれ	ふれ	ぶれ	むれ
ちよ	ぢよ	ひよ	びよ	みよ

上

た行	だ行	は行	ば行	ま行
落	恥	强	亡	試
ち	ぢ	ひ	び	み
ち	ぢ	ひ	び	み
ちる	ぢる	ひる	びる	みる
ちる	ぢる	ひる	びる	みる
ちれ	ぢれ	ひれ	びれ	みれ
ちよ ちろ	ぢよ ぢろ	ひよ ひろ	びよ びろ	みよ みろ

口文語語 動詞活用對照表

（「」内の語は語幹と語尾とを區別することの出來ないものである）

文語	活用	語幹の例	未然	連用	終止	連體	已然	命令
四段	か行	書	か	き	く	く	け	け
	が行	漕	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
	さ行	推	さ	し	す	す	せ	せ
	た行	打	た	ち	つ	つ	て	て
	は行	習	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
	ば行	學	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
	ま行	讀	ま	み	む	む	め	め
	ら行	取	ら	り	る	る	れ	れ
變格	ら行	有	ら	り	り	る	れ	れ
	な行	死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ぬれ
	か行	「來」	こ	き	く	くる	くれ	こよ
	さ行	「爲」	せ	し	す	する	すれ	せよ
上二段	か行	起	き	き	く	くる	くれ	きよ
	が行	過	ぎ	ぎ	ぐ	ぐる	ぐれ	ぎよ
	た行	落	ち	ち	つ	つる	つれ	ちよ
	だ行	恥	ぢ	ぢ	づ	づる	づれ	ぢよ
	は行	强	ひ	ひ	ふ	ふる	ふれ	ひよ
	ば行	亡	び	び	ぶ	ぶる	ぶれ	びよ
	ま行	試	み	み	む	むる	むれ	みよ
	や行	報	い	い	ゆ	ゆる	ゆれ	いよ
	ら行	懲	り	り	る	るゝ	るれ	りよ
上一段	か行	「着」	き	き	きる	きる	きれ	きよ

口語	活用	語幹の例	未然	連用	終止	連體	已然	命令
四段	か行	書	か	き	く	く	け	け
	が行	漕	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
	さ行	推	さ	し	す	す	せ	せ
	た行	打	た	ち	つ	つ	て	て
	は行	習	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
	ば行	學	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
	ま行	讀	ま	み	む	む	め	め
	ら行	取	ら	り	る	る	れ	れ
變格	ら行	有	ら	り	る	る	れ	れ
	な行	死	な	に	ぬ	ぬ	ね	ね
	か行	「來」	こ	き	くる	くる	くれ	こい
	さ行	「爲」	しせ	し	する	する	すれ	しせよ
上一段	か行	起	き	き	きる	きる	きれ	きよ きろ
	が行	過	ぎ	ぎ	ぎる	ぎる	ぎれ	ぎよ ぎろ
	た行	落	ち	ち	ちる	ちる	ちれ	ちよ ちろ
	だ行	恥	ぢ	ぢ	ぢる	ぢる	ぢれ	ぢよ ぢろ
	は行	强	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ ひろ
	ば行	亡	び	び	びる	びる	びれ	びよ びろ
	ま行	試	み	み	みる	みる	みれ	みよ みろ
	や行	報	い	い	いる	いる	いれ	いよ いろ
	ら行	懲	り	り	りる	りる	りれ	りよ りろ
	か行	「着」	き	き	きる	きる	きれ	きよ きろ

文語口語動詞活用對照表

（「」内の語は語幹と語尾とを區別することの出來ないものである）

文語

活用語の例	語幹	語尾 未然	語尾 連用	語尾 終止	語尾 連體	語尾 已然	語尾 命令
四段 か行 書	か	か	き	く	く	け	け
四段 が行 漕	が	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
四段 さ行 推	さ	さ	し	す	す	せ	せ
四段 た行 打	た	た	ち	つ	つ	て	て
四段 は行 習	は	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
四段 ば行 學	ば	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
四段 ま行 讀	ま	み	み	む	む	め	め
四段 ら行 取	ら	ら	り	る	る	れ	れ
變格 ら行 有	ら	ら	り	り	る	れ	れ
變格 な行 死	な	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
變格 か行 「來」	こ	こ	き	く	くる	くれ	こよ
變格 さ行 「爲」	せ	せ	し	す	する	すれ	せよ
上一段 か行 起	き	き	き	く	くる	くれ	きよ
上一段 が行 過	ぎ	ぎ	ぎ	ぐ	ぐる	ぐれ	ぎよ
上一段 た行 落	ち	ち	ち	つ	つる	つれ	ちよ
上一段 だ行 恥	ぢ	ぢ	ぢ	づ	づる	づれ	ぢよ
上一段 は行 强	ひ	ひ	ひ	ふ	ふる	ふれ	ひよ
上一段 ば行 亡	び	び	び	ぶ	ぶる	ぶれ	びよ
上一段 ま行 試	み	み	み	む	むる	むれ	みよ
上一段 や行 報	い	い	い	ゆ	ゆる	ゆれ	いよ
上一段 ら行 懲	り	り	り	る	るゝ	るれ	りよ
上一段 か行 「着」	き	き	き	きる	きる	きれ	きよ
上一段 な行 「煮」	に	に	に	にる	にる	にれ	によ
上一段 は行 「干」	ひ	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ
上一段 ま行 「見」	み	み	み	みる	みる	みれ	みよ
上一段 や行 「射」	い	い	い	いる	いる	いれ	いよ
上一段 わ行 「鑄」	ゐ	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ
下二段 か行 「得」	え	え	え	える	える	えれ	えよ
下二段 あ行 受	け	け	け	ける	ける	けれ	けよ
下二段 か行 投	げ	げ	げ	げる	げる	げれ	げよ
下二段 が行 寄	せ	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ
下二段 ざ行 交	ぜ	ぜ	ぜ	ぜる	ぜる	ぜれ	ぜよ
下二段 た行 捨	て	て	て	てる	てる	てれ	てよ
下二段 だ行 出	で	で	で	でる	でる	でれ	でよ
下二段 な行 尋	ね	ね	ね	ねる	ねる	ねれ	ねよ
下二段 は行 教	へ	へ	へ	へる	へる	へれ	へよ
下二段 ば行 述	べ	べ	べ	べる	べる	べれ	べよ
下二段 ま行 褒	め	め	め	める	める	めれ	めよ
下二段 や行 越	え	え	え	える	える	えれ	えよ
下二段 ら行 枯	れ	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ
下二段 わ行 植	ゑ	ゑ	ゑ	ゑる	ゑる	ゑれ	ゑよ
下一段 か行 「蹴」	け	け	け	ける	ける	けれ	けよ

口語

活用語の例	語幹	語尾 未然	語尾 連用	語尾 終止	語尾 連體	語尾 已然	語尾 命令
四段 か行 書	か	か	き	く	く	け	け
四段 が行 漕	が	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
四段 さ行 推	さ	さ	し	す	す	せ	せ
四段 た行 打	た	た	ち	つ	つ	て	て
四段 は行 習	は	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
四段 ば行 學	ば	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
四段 ま行 讀	ま	み	み	む	む	め	め
四段 ら行 取	ら	ら	り	る	る	れ	れ
四段 な行 死	な	な	に	ぬ	ぬ	ね	ね
變格 か行 「來」	こ	こ	き	く	くる	くれ	こい
變格 さ行 「爲」	せ	せし	し	する	する	すれ	せしよ
上一段 か行 起	き	き	き	きる	きる	きれ	きろよ
上一段 が行 過	ぎ	ぎ	ぎ	ぎる	ぎる	ぎれ	ぎろよ
上一段 た行 落	ち	ち	ち	ちる	ちる	ちれ	ちろよ
上一段 だ行 恥	ぢ	ぢ	ぢ	ぢる	ぢる	ぢれ	ぢろよ
上一段 は行 强	ひ	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひろよ
上一段 ば行 亡	び	び	び	びる	びる	びれ	びろよ
上一段 ま行 試	み	み	み	みる	みる	みれ	みろよ
上一段 や行 報	い	い	い	いる	いる	いれ	いろよ
上一段 ら行 懲	り	り	り	りる	りる	りれ	りろよ
上一段 か行 「着」	き	き	き	きる	きる	きれ	きろよ
上一段 な行 「煮」	に	に	に	にる	にる	にれ	にろよ
上一段 は行 「干」	ひ	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひろよ
上一段 ま行 「見」	み	み	み	みる	みる	みれ	みろよ
上一段 や行 「射」	い	い	い	いる	いる	いれ	いろよ
上一段 わ行 「鑄」	ゐ	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐろよ
下一段 か行 「得」	え	え	え	える	える	えれ	えろよ
下一段 あ行 受	け	け	け	ける	ける	けれ	けろよ
下一段 か行 投	げ	げ	げ	げる	げる	げれ	げろよ
下一段 が行 寄	せ	せ	せ	せる	せる	せれ	せろよ
下一段 ざ行 交	ぜ	ぜ	ぜ	ぜる	ぜる	ぜれ	ぜろよ
下一段 た行 捨	て	て	て	てる	てる	てれ	てろよ
下一段 だ行 出	で	で	で	でる	でる	でれ	でろよ
下一段 な行 尋	ね	ね	ね	ねる	ねる	ねれ	ねろよ
下一段 は行 教	へ	へ	へ	へる	へる	へれ	へろよ
下一段 ば行 述	べ	べ	べ	べる	べる	べれ	べろよ
下一段 ま行 褒	め	め	め	める	める	めれ	めろよ
下一段 や行 越	え	え	え	える	える	えれ	えろよ
下一段 ら行 枯	れ	れ	れ	れる	れる	れれ	れろよ
下一段 わ行 植	ゑ	ゑ	ゑ	ゑる	ゑる	ゑれ	ゑろよ
下一段 か行 「蹴」	け	け	け	ける	ける	けれ	けろよ

時

たり	ぬ	つ	む	けり	き
たら	なな	て		けら	
たり	に	て			
たり	ぬ	つ	む	けり	き
たる	ぬる	つる	むむ	ける	し
たれ	ぬれ	つれ	めめ	けれ	しか
(たれ)	(れ)	(てよ)			

た	だ	よう
たら(ば)	だら(ば)	
た	だ	ようう
た	だ	
たら(ば)	だら(ば)	

文語口語助動詞活用對照表

種類＼活用形＼文體	文語 本形	文語 未然	文語 連用	文語 終止	文語 連體	文語 已然	文語 命令	口語 本形	口語 未然	口語 連用	口語 終止	口語 連體	口語 已然	口語 命令
打消	ず	ず	ず	ず	ぬ	ね		ぬ		ず	ぬ(ん)	ぬ(ん)	ね	
打消	ざり	ざら	ざり	(ざり)	ざる	ざれ	ざれ	ない	ない	なく	ない	ない	なけれ	
打消	じ			じ	(じ)	(じ)								
打消	まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ		まい			まい	(まい)		
指定	なり	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ	だ	だら(ウ)	だつ(タ)	だ	(な)	なら(バ)	
指定								です	でせ(ウ)	でし(タ)	です			
推量	らし			らし	らし	らし		らしい		らしく	らしい	らしい		
推量	たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ	ようう			ようう			
推量	まし			まし	まし	ましか								
推量	べし	べく	べく	べし	べき	べけれ								
推量	べかり	べから	べかり		べかる	べかれ								
推量	む			む	む	め								
推量	らむ			らむ	らむ	らめ								
推量	けむ			けむ	けむ	けめ								
推量	めり			めり	める	めれ								
時	き			き	し	しか		た	たら(ウ)		た	た	たら(バ)	
時	けり	けら		けり	ける	けれ		だ	だら(ウ)		だ	だ	だら(バ)	
時	む			む	む	め								
時	つ	て	て	つ	つる	つれ	(てよ)	ようう			ようう			
時	ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	(れ)							
時	たり	たら	たり	たり	たる	たれ	(たれ)							
時	り	(ら)	(り)	り	る	れ								
受	る	れ	れ	る	るる	るれ	れよ	れる	れ	れ	れる	れる	れれ	よれ(れろ)

文語口語助動詞活用對照表

種類＼活用形＼文體	文語 本形	文語 未然	文語 連用	文語 終止	文語 連體	文語 已然	文語 命令	口語 本形	口語 未然	口語 連用	口語 終止	口語 連體	口語 已然	口語 命令
打消	ず	ず	ず	ず	ぬ	ね		ぬ		ず	ぬ(ん)	ぬ(ん)	ね	
打消	ざり	ざら	ざり	(ざり)	ざる	ざれ	ざれ	ない	ない	なく	ない	ない	なけれ	
打消	じ			じ	(じ)	(じ)								
打消	まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ		まい			まい	(まい)		
指定	なり	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ	だ	だら(ウ)	だつ(タ)	だ	(な)	なら(バ)	
指定								です	でせ(ウ)	でし(タ)	です			
指定	たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ							
推量	らし			らし				らしい		らしく	らしい	らしい		
推量	まし			まし	まし	ましか								
推量	べし	べく	べく	べし	べき	べけれ								
推量	べかり	べから	べかり		べかる	べかれ								
推量	む			む	む	め		ようう			ようう			
推量	らむ			らむ	らむ	らめ								
推量	けむ			けむ	けむ	けめ								
推量	めり			めり	める	めれ								
推量	き			き	し	しか		た	たら(ウ)	た	た	た	たら(バ)	
推量	けり	けら		けり	ける	ける		だ	だら(ウ)		だ	だ	だら(バ)	
推量	む			む	む	め		ようう			ようう			
推量	つ	て	て	つ	つる	つれ	(てよ)							
推量	ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	(ね)							
推量	たり	たら	たり	たり	たる	たれ	(たれ)							
推量	り	(ら)	(り)	り	る	(れ)								
受身	る	れ	れ	る	る	れ	れよ	れる	れ	れ	れる	れる	れれ	(れろ)よれ
受身	らる	られ	られ	らる	らる	られ	られよ	られる	られ	られ	られる	られる	られれ	(られろ)られよ
可能	る	れ	れ	る	る	れ		れる	れ	れ	れる	れる	れれ	
可能	らる	られ	られ	らる	らる	られ		られる	られ	られ	られる	られる	られれ	
使役	す	せ	せ	す	する	すれ	せよ	せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ(せろ)
使役	さす	させ	させ	さす	さする	させ	させよ	させる	させ	させ	させる	させる	させれ	させよ(させろ)
使役	しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ							
尊敬	す	せ	せ	す	する	すれ	せよ	ます	ませ	まし	ます	ます	ますれ	ませ(まし)
尊敬	さす	させ	させ	さす	さする	させ	させよ							
尊敬	しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ							
尊敬	る	れ	れ	る	る	れ	れよ							
尊敬	らる	られ	られ	らる	らるる	られ	られよ							
希望	たし	たく	たく	たし	たき	たけれ		たい	たく	たい	たい	たい	たけれ	
希望	まほし	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ								
比況	ごとし	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき			やうだ	やうだら(ウ)	やうだつ(タ)	やうだ	やうな	やうなら	
比況								やうです	やうでせ(ウ)	やうでし(タ)	やうです			
嘆詠	なり	なり		なり	なる	なれ								
嘆詠	けり			けり	ける	けれ								

昭和九年十一月二十四日印刷
昭和九年十一月二十八日發行
昭和十年十月十日訂正再版印刷
昭和十年十月十五日訂正再版發行

中等教科文法上級用
定價金五拾七錢

不許複製

著作者　藤村作
東京市京橋區銀座一丁目五番地
發行兼印刷者　大日本圖書株式會社
代表者專務取締役　杉山常次郎

發行所
東京市京橋區銀座一丁目五番地
大日本圖書株式會社
電話京橋(56)二七三・二七四・二四〇七番
電信略號トショ・振替口座東京二一九番

大日本圖書株式會社

東京市神田區錦町三丁目二番地
電話神田三三三番・三三四番
振替口座東京一七五五番

印刷所　株式會社　常光堂

東京市神田區錦町三丁目五番地

發行所　大日本圖書株式會社

東京市神田區錦町三丁目五番地

定價　金五錢

昭和十年十月廿五日印刷納本
昭和十年十月廿五日發行
昭和十年十一月廿八日發行
昭和十七年十二月二十四日再版

著作權所有

檢閱濟

印刷者　株式會社　常光堂

東京市神田區錦町三丁目五番地

發行者　大日本圖書株式會社

東京市神田區錦町三丁目五番地

定價金五錢

發行所　文部省圖書局

中等教科書

文庫
35
332
広島大学図書
2000038332